平民詩人

著共 三鑑 村内
造賢 上畔

平民詩人

内村鑑三
畔上賢造
著

大正三年三月

内村鑑三

大正三年三月

平民詩人

警醒社書店

序に代ふ

不信國に進歩せる文明がある、強固なる政府がある、強大なる陸海軍がある、完備せる警察がある、複雜なる法律がある、憲法がある、教育がある、善き交通機關がある、銀行がある、保險がある、有ゆる會社がある、新聞がある、雜誌がある、美はしき文學がある、之に循じて大政治家が居る、大軍人が居る、大法律家が居る、大經濟學者が居る、實業家が居る、批評家が居る、小說家が居る、才能と知識の方面に於て多くの敬ふべき人が居る、劇がある、劇場がある、劇作者が居る、又理學、文學、法學、工學の方面に於て多くの大家が居る、斯く算へ來て不信國になきものは一つもないやうに見える、其國民の多數が之以外に何をも求めないのは敢て怪しむに足らない。

然し不信國に一つ無いものがある、高遠なる詩歌がない、循て偉大なる詩人が居らない、理想を供し未來を示す預言的詩人が居らない、此缺乏は不信國の特徴である、不信は此世の凡ての事に於ては成功するが、此世以上の事に於ては失敗である、不信國より預言者は起らない、詩人は出ない、それは其筈である、神を認めず、キリストを斥け、福音を蔑視み、來世を嘲ける國民の中より永生と天國と窮りなき榮光とを歌ふ詩人の出でやう筈はない、不信國は大詩人の缺乏、むしろ其皆無に由て不信の罪を宣告せらるゝのである。

然し深く考へて見て世に詩に勝さるの寶はないのである、詩人に勝さるの人物はないのである、一人のミルトンを得んがためには百千人の政治家又は經濟學者又は法律家を失ふても可い、國に一人のエレミヤを有つは大軍隊を有つに勝さるの勢力である、而して凡ての

強大國は之を有つたのである、英國よりチョーサー、ミルトン、シエークスピヤ、ヲルヅヲス、ブラウニング、テニソンを除きて何が永久に貴いものが殘る乎、獨逸、伊太利、那威、丁抹、然り、露西亞、西班牙、葡萄牙さへも世界的大詩人を有つたのである、大なる詩歌と偉大なる詩人が缺けて、國に其存立上肝要なるものが缺けて居るのである、國の生命は其詩歌である、其先導者は其詩人である、詩歌と詩人とをなくして國民は盲人である、彼等は幽暗に歩むが故に、終に溝の中に落ちて泥水の中に沈まざるを得ない。

然れば我等は祈らんかな大詩人の出でんことを、而して大詩人を得んがために、其準備として天國の福音を說かんかな。

右舊作を以て序に代ふ。

大正三年三月

例言

一巻頭のワルト・ホヰットマン論は内村の草する處、その他は皆畔上の筆に成る、ホヰットマン論は嘗て『櫟林集』の中に收められて一度世に出でしものであるが、『櫟林集』は絶版となりし故、之に訂正を加へて再び茲に公けにするのである。

一アルフレッド・テニソン論以下の五篇は皆一度雜誌『聖書之研究』誌上に掲載せられしもの、之に充分なる訂正を加へたのである。

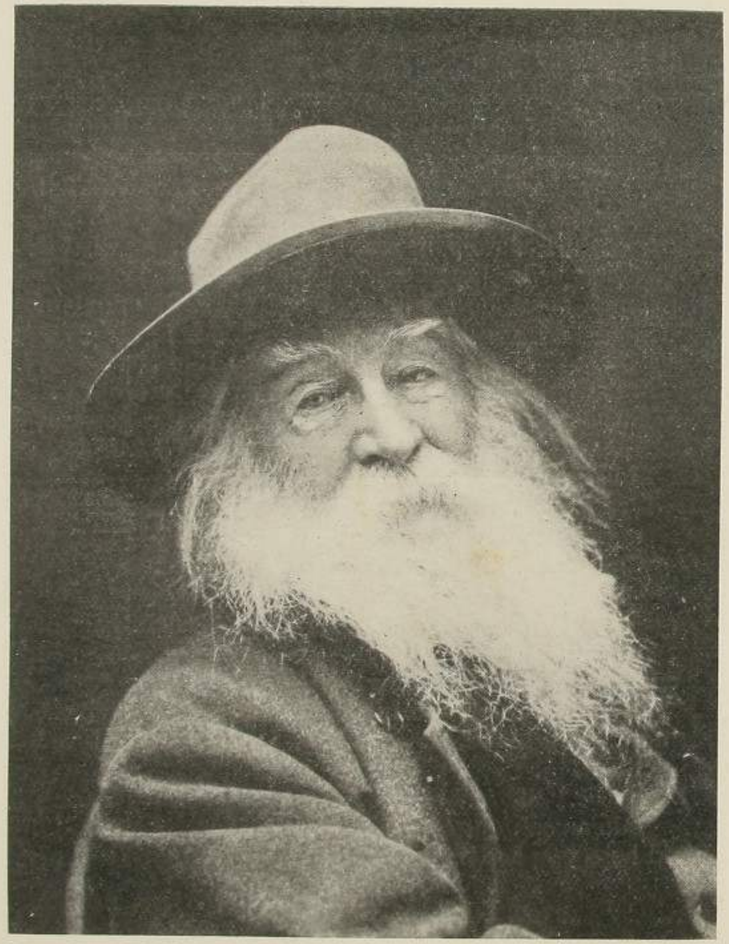
目次

ワルト ホヰットマン……一頁
地と人……一
今の米國人……三
米國の希望……五
ワルト・ホヰットマン……六
彼の生涯……七
金錢を賤しむ……九
學問の人に非ず……一〇
文才の人に非ず……一二
彼の特有物……一五
彼の詩題……一六
彼の目的……一七
彼の宗教……一九
彼の天然觀……二四

彼の國家觀……三五
彼の同情性……四〇
彼の人生觀……四五
米人の待遇……四八
アルフレッド　テニソン……五七
希望的宇宙觀……五七
詩人としてのテニソン……五九
追想歌……六一
古哲人……七五
短篇の詩……八三
晩年の詩……八六
ローエルが早年の歌……九三
或る譬話（愛の歌第一）……九三
月の曲（愛の歌第二）……九九
祖國は何處（愛の歌第三）……一〇三

眞の敎會（生命の歌第一）……一〇六
遺産（生命の歌第二）……一一二
泉の詩（生命の歌第三）……一一九
グリーンリフ　ホヰッチヤ……一二五
生涯……一二五
修養……一三一
奴隷解放の詩……一三四
勞働の詩……一四一
叙事詩……一四六
宗敎詩……一四八
ウヂルヅヲスが晩年の詩……一六一
勞働者の晝の讃歌……一六二
汝の誇りは大なりき……一六六
宵の明星に與ふ……一六九
五月の朝……一七一

ホヰットマン



千八百十九年五月米國にて生まれ
千八百九十二年三月米國にて逝く

我等何故泣くぞ傷むぞ……一七四
眞理は何處に在る乎……一七七
一老人……一七九
夜の女王……一八四
夜の流れ……一八六
激流の畔に立ちて……一八九
光明耀々の夕……一九一
カレン ブライアント……二〇一
生涯……二〇一
人物……二一〇
詩風……二一三
叙事詩……二一四
自由の詩……二一七
天然の詩……二二六
人生の詩……二四二

平民詩人

内村鑑三
畔上賢造　合著

ワルト　ホヰットマン

地と人

米國は大國である、太平洋より太西洋まで、ミシシピ河の源より其の河口まで、廣袤三百萬方哩、其中に世界最大の原野がある、最大の河がある、最大の湖水がある、最大の瀑布がある、其他尙ほ最大と稱すべき者が尠くない、米國は多くの點に於て世界最大の國である。若し地がある如く人があるとならば米國は大人物を產すべき國であ

WHAT IS GRASS?

A child said *What is grass?* fetching it to me with full hands;
How could I answer the child? I do not know what it is any more than he.
I guess it must be the flag of my disposition, out of hopeful green stuff woven.
Or I guess it is the handkerchief of the Lord,
A scented gift and remembrancer designedly dropt
Bearing the owner's name someway in the corners, that we may see and remark, and say *Whose?*
Or I guess it is a uniform hieroglyphic,
And it means, Sprouting alike in broad zones and narrow zones,
Growing among black folks as among white.

And now it seems to me the beautiful uncut hair of graves.
Tenderly will I use you curling grass,
It may be you transpire from the breast of young men,
It may be if I had known them I would have loved them,
It may be you are from old people, or from offspring taken soon out of their mothers' laps,
And here you are the mother's laps.

る、ナイヤガラの瀑が人と成つて轟く者、ミシシピの流れが人と成つて灌ぐ者、ロッキー山の如く高き者、チェサピーク灣の如く深き人物を産すべきである、而うして米國は今日までの其短かき歴史に於て多くの世界的人物を生じた、政治家としてはワシントン、ジェフッソン、フランクリン、リンコルン、宗教家としてはジョナサン・エドワード、文士としてはエマソン、トロー、是れ皆な世界第一流の人物である、米國が世界に向て誇るべき者は其養豚の群ではない、其鋼鐵と銃鐵とではない、其蛛の巣の如き鐵道ではない、誠に其産せし人物である、其、彼等に由て唱へられし自由である、其、彼等に由て施されし人道である、洵に曾てカーライルが曰ひし如く、英人の誇るべき者は其領土たる印度に非ずして、其所有たる沙翁の作であるが如く、米國の誇るべき者は其菲律賓群島に非ずして其エマ

ソン集である、其ジョナサン・エドワードの神學論である、米國の偉大なるは其沃饒なる原野に於てあらずして、其無私なる政治家に於て在る、其宏闊なる文士に於てある、其神と交はる最も深き宗教家に於てある、若し彼等にして微からん乎、ペンシルバニヤの炭山何かある、ネバダの金鑛何かある、テキサスの水田何かある、カリホルニヤの果園何かある、ミネソタの麥田何かある、吾人は米國の産せし人物を羨む、其ワシントン府の金庫に堆積せらるゝ銹腐る金と銀とを羨まない、前なる者は永久の寶である、後なる者は塵芥と糞土とである。

今の米國人

然しながら惜むべし今の米國人は前の米國人ではない、彼等は今や

其天與の富の呑む所となりつゝある、然り、彼等の多數は已に業に其呑み去る所となつた、彼等は今や神と自由とを追求めずして土と金とを求む、彼等は今や天に寶を蓄へんとせずして地に大なる者と成らんと欲する、彼等の理想的人物は今や純然たる地的人物である、コンコルドの哲人に非ずして新聞王ハーストである、石油王ロックフェラーである、政治家としては彼等は自由の戰士たるジェファソンの如き者を迎へずして精力の人なるルーズベルトの如き人を仰ぐ、宗教家としては彼等はジョナサン・エドワードの如き高士を尊まずして、「宗教界の成功者」を貴ぶ、主義は今や米國に於て滅びつゝある、歌は絶え、理想は消えつゝある、米國に今譽き渉る者はワルデン湖邊より出し文士トローの天然の聲ではない、製造所の鎚の聲である、兩換店の貨幣の音である、Does it pay?「果して勘定に合ふ乎」と、是れ今

や殆どすべての米國人が何事に就ても提出する問題である、何事も方法と化し、何事も會計吏の手に渡りつゝある、政治は勿論、思想も美術も、然り神學と傳道とまでが弗と仙に由て計算されつゝある、實に米國の今の狀態ほど淺ましき者はない、全人類の希望を脊に擔ふて起ちし此國と民とは今や羅馬の共和國の取りし滅亡の道に進みつゝある、彼にして亡びん乎、人類は誰に由て自由の光明に入らんとかする、余輩此事を思ひ、太平洋の水に臨み東の方遙かに西大陸を想望する時、又洋底を潛りて余輩に達する電報を讀む時に、長太息を發することその幾回なるを知らない。

米國の希望

乍然、神は未だ米國を棄て給はない、彼は今尙ほ預言者を送りて之

を警め給ふ、縱し其文士も宗教家も今や奴僕の一種と化し、富豪の門に座して其案より落るパンの餘屑にて養はれんと欲する者となりしと雖も、ロッキー山の靈は未だ眠らない、ミシシピの魂は未だ盡きない、米國の山野は今尙ほ眞個の自由を宿して居る、詩人ブライアントの愛せし森は今尙ほ自由の風に搖るぎつゝある、ワルデンの小湖は今尙ほ天の碧を映して自由の水を湛えつゝある、嗚呼ハドソン、嗚呼デラウェヤ、嗚呼コネーチカット、嗚呼メリマック、汝の水の盡きざる間は汝の岸に自由を盡きざらしめよ、ホイッチャーを起し、ブライアントを起して止む勿れ、汝の米國を救へよ、而して米國を以て全世界を救へよ。

ワルト　ホイッットマン

而して此天職を以て生れ來りし者がワルト・ホイッットマン(Walt Whitman)である、純粹の米人、舊世界の痕跡をだも留めず、其骨の髓まで新世界の人たりしは此人である、彼に舊きはなかつた、彼はすべて新らしくあつた、彼に帝王も監督もなかつた、彼に唯平民があつたのみである、彼には過去は無つた、現在と未來とがあつたのみである、彼は貧しき人なりしも大手を揮つて人生の大道を歩んだ、彼は純粹の米人であつた、即ち「人」であつた、勳章も位階も何も有たざる、又之を求めざる、然り之を賤めたる「アダムの子供」の一人であつた。

彼の生涯

彼の生涯は實に單純なる者であつた、千八百十九年五月三十一日、ニューヨルク州ロングアイランドなるウェストヒルの父の農舍に生

れ、長じてブルックリン市の某新聞社に雇はれ、二十歳にして獨力を以て『ロングアイランダー』なる週刊雜誌を發刊し(今尙ほ存す)、猶ほ是に慊らずして再びブリックリン市に出て其『イーグル』新聞の編輯室に入り、此處にやゝ滿足なる地位を保ちしが、或る意見の衝突よりして又茲を去り、遠く南方ニューオリン市に遊び、其處に『クレセント』新聞の編輯主任たりしが、北方戀しさに再び故鄕に還り、自から小なる書店を開き、同時に又『フリーマン』なる新聞を發行し、茲に彼の終生の事業なる『草の葉』(Leaves of Grass)の著作に着手した、然るに南北戰爭の始まるありて彼の兄弟の一人の戰地に在りて負傷せしを聞きしや、彼は直に筆を投じて應援に赴き、彼を野戰病院に看護して健康に復さしめた、然るに多數の同胞の傷と病に苦むを見て還るに忍びず、茲に純然たる看護卒と化し、戰爭終るまで戰地に止つた、

後、大統領リンコルンの知遇を得て中央政府に官吏たりしも、暫時にして職を辭し、フィラデルヒヤ市外、カムデンの地に一小屋を借受け、茲に家僕一人と共に淡はき貧しき生涯を送り、千八百九十二年三月二十七日、七十三歲を以て飾りなき彼の一生を終つた。

以上は彼の外面の生涯である、一平民の平凡なる生涯である、彼の平生を視て誰も彼が世界大の詩人であつて、新大陸の預言者であり しことを識らなかつた、衷に大なる者は常に外に小である、彼が外に鳴らないのは衷に深いからである、ホイットマンは理想的米國人であつた、故に平服と平屋と平食との外に何の慾も望もなかつた。

金錢を賤む

然らば彼の富とは何んでありし乎、勿論金ではなかつた、拜金宗の

米國に生れて彼程金錢に淡白なる者はなかつた、彼は幾回か彼の手に落ち來りし有利なる事業を放棄した、彼は曾て曰ふた

『余は金錢を賤む』

と、彼は弗の表號をすらも知らざりしとの事である、彼の金錢の受取證には$は常にQと記されしとのことである、米國の繁榮を誇つて止まざりし此人は米國の富を弗に於て認めなかつた。

學問の人に非ず

然らば彼の富は學問に於てありし乎と云ふに、爾うでもない、前にも述べし如く彼は學校に於て學んだ人ではない、彼は一つの學位をも有たなかつた、彼の學問は人生の活劇に於て得た者である、故に彼は自から無學の平民を貴んで、鼻眼鏡の下に學問を誇る學者を賤んだ、彼は

『天眞にして氣取らざる者』

を愛した、又

『能力ある敎育なき人』

を尊んだ、彼は勿論、自身敎育の無い人ではなかつた、彼は自修の人であつた、十六歳の時ウヂルター・スコットの詩集一冊を購ひ、之を五十年間の彼の伴侶としたとのことである、又時には獨り海濱に至り、其砂の上に、又樹影の下に、舊新兩約聖書、シェクスピヤ、ホーマー、エスキラス、ソフホクリス、ゲーテ、ダンテ等の作を讀んだとのことである、彼は常に曰ふた

『書は之を讀む場所に由て其價値を異にす』

と、即ち以上の如き大著述は是れ室内に於て讀むべき者ではない、

青き海原に面し、青き空の下に、自由の風に吹かれながら讀むべき者であるとのことである、彼は又彼の母國の言語の外、別に外國語を解し得なかつた、故にホーマー、ゲーテ、ダンテ等はすべて翻譯書に由て讀んだと曰ふて居る、誠に大詩人としては有名なるジョン・バンヤンにも劣らざる寡聞淺學の士であつた、然し彼は少しも彼の無學を耻としなかつた。

文才の人に非ず

然らば彼に文才があつた乎と云ふにそれも無かつた、余輩は彼は詩人なりと言ふ、然しながら是れ彼れ自身が自己に就て言ふた所であつて、世が彼に就て道ふたことではない、彼の詩なる者は文學上の如何なる標準に照らして見ても詩ではない、之に韻もなければ、律

もない、唯の散文其儘である、亦散文にしても美文ではない、重苦しい所もあれば俗語其儘の所もある、英語を解し得る讀者は左の二三の例に由て彼の文體如何を覗ふべきである。

"I celebrate myself, and sing myself,
And what I assume you shall assume,
For every atom belonging to me as good belongs to you."

"Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,
Turbulent, fleshy, sensual, eating, drinking and breeding,
No sentimentalist, no stander above men and women or apart from them,
No more modest than immodest."

"O my brave soul!
O farther, farther sail!
O daring joy, but safe! Are they not all the seas of God?

O farther, farther, farther sail!"

是れ詩であると云へば詩である、然し普通の意味に於ては如何見ても詩でない、詩人コレリッヂの定義に由れば

『詩は最も美き思想を最も美き言葉を以て表はしたる者なり』

とのことであるが、ホヰットマンの詩なる者は其思想の如何は別問題として、其言葉は決して「美き言葉」ではない、故に詩人スウィンバルンの如きは彼を評して曰ふた、

『泥溝の中に轉ぶ飲んだくれの婦人の如し』

と、實に職業的詩人の眼には彼は多分爾う見えたのであらふ、然しながら世の文士と批評家とを眼中に置かざりし彼れホヰットマンは斯かる批評には何の注意をも拂はなかつた、彼は自から斷じて曰ふた「我は詩人なり」と、而して彼は詩を以て萬世を化せんとした。

彼の特有物

然らば彼の富は何に於て在りし乎と云ふに、正直なる清き心より出たる理想に於て在つた、彼は詩人の天職を詠じて曰ふた、

『大なる理想が
噫、我が兄弟よ、大なる理想が詩人の天職なり』

と、而して理想の一點に於ては彼は實に實に豐富であつた、實に理想の一點に於ては彼は詩人中の帝王であつた、余輩の見る所を以てすれば此點に於ては彼は確かに余輩の知るすべての詩人の及ぶ所でない、ウォルズヲスも及ばない、ブライアントも及ばない、ダンテ、ゲーテと雖も決して彼の如く豐富でないと思ふ、ホヰットマンの一行は一大思想である、之を伸して一長篇となすことが出來る。

彼の詩題

勿論今茲に彼の著作に就てすべてを語ることは出來ない、然れども其如何なる者なりし乎は彼の詩題を一見して分かる、『草の葉』とは彼が彼の詩集全體に與へし題目である、而して其中に幾箇の部門がある、其一は「自己の歌」である、其第二は「男女兩性の歌」である、其他「戰爭の歌」がある、「死の歌」がある、「平民國の歌」がある、而して又各部門の中に幾箇の短篇、長篇があるが、多くは別に詩題を設けず、其發端の句を以て名として居る、「平民國の歌」の一を「青きオンタリオの岸に於て」と云ふ、是れ其發端の句である、「死の歌」の中にアブラハム・リンコルンの死を悼める歌がある、彼の作中最も優美なる者の一である。

"When lilacs last in the dooryard bloom'd."

『丁香花が最後に戸口の庭に咲きし時に』

是れ此優篇の題名である、題、奇拔にして、作、平凡なるが平凡詩人の常である、然れども、題、平凡にして、作、非凡なるが此人の特質である、彼は彼の作を總稱して『草の葉』といふた、誠に謙遜なる名である、乍然、謙遜なる丈けそれ丈け深遠且つ雄大である。

彼の目的

今より少しく彼の預言に就て述べんに、(余輩は彼の預言と曰ふて詩想と曰はない、そは彼は詩人であるよりは寧ろ預言者であつたからである)、彼は一の道德的目的を以て世に起つた者である、彼は美文を弄するには餘りに眞面目であつた、彼は彼の作詩の目的の一とし

て曰ふた、

『余が「草の葉」を發刊するに至りし主なる動機は合衆國發展最終の目的は心靈的にして又神人的たらざるべからずとの余の確信に存す、此發展を促し、之を扶くる事…少くとも之に人の注意を惹き、或ひは其必要を感せしむる事…是れ此詩集の目的の初にして、其中にして又其終りなり』

と、前にも述べしが如く彼の目的とせし讀者は上流社會の人ではなかつた、彼は曰ふた、

『余が此書に於て其始めより終りに至るまで、一歩も讓ることなく余の目的とする所の者は勞働の男と勞働の女となり』

と、而して

『彼等に盈たすに强健にして純潔なる人格と宗教心とを以てし、

而して彼等に根本的の所有物又常習として善良なる心を供せん』こと、是れ詩人としての、又た預言者としての彼の終生の目的であつた。

彼の宗教

故に先づ始めに彼の宗教に就て語らふ、人には何人にも宗教が無くてはならない、況して詩人に於てをや、ワルト・ホイットマンにも亦宗教があつた、然し如何なる宗教か、彼は確かに世に所謂基督信者では無つた、彼は屢々言明して曰ふた、

『余は正統派の信者に非ず』

と、而して彼の國人も亦彼を基督信者として認めなかつた、彼等は「彼は萬有神教徒なり」と曰ふた、彼は滅多に神と基督との名を用ゐな

かつた、彼の詩を通讀して彼が宗教家の所謂善男善女の中に加はるべき者でない事は能く分かる、然らば彼は無宗教の人であつたかと云ふに、決して、否な決して爾うでない、彼は眞に「神に醉ふたる人」であつた、餘りに神と親しかりしが故に無神論者のやうに見えたる人であつた、彼を萬有神教徒と嘲けりし米國の基督信者は同じ忌はしき名をエマソンにも與へた、彼等はトローをも、カーライルをも神の預言者として認めなかつた、故に彼等が彼等の中に起りし神の此寵兒の眞價を認め得なかつたことは敢て怪むに足りない、預言者は常に教會の外に起る、昔時の猶太國に於ても爾うであつた、今の米國に於ても爾うである。

宗教とよ、ホイットマンは曰ふた、

『余は曰ふ全世界と空天に懸るすべての星は宗教のためなりと、

余は曰ふ人は未だ曾て彼がなるべき丈けの半分も敬虔ならざりしと、

何人も未だ曾て爲すべき丈けの半分も神を拜せず又之を敬まはず、

何人も未だ曾て彼自身が如何に神聖なる乎未來が如何に確實なる乎に就て考ふべく始めもせずと。

余は曰ふ此國の眞正の且つ永久の偉大は其宗教にありと、

之に由らずして眞正の且つ永久の偉大あることなしと、

宗教なくして品性も亦生涯と稱すべき生涯もあるなしと、

宗教なくしてまた國も男も女もあるなしと、

神の存在に就て彼は曰ふた、

『余は萬物に就て神を見且つ神に聽く、然れども未だ少しも神を解せず、

余は四六時中、一時として又一瞬間として神に就て或物を見ざる時なし、

余は男と女との面に於て神を見る、又鏡に對し余の面に於て神を見る、

余は神よりの書翰を途上に於て拾ふ、皆な神の手を以て署名さる、

余は之を元の所に遺す、そは余は何處に往くと雖も

尙ほ他に彼よりの書翰が時を定めて余の手許に達するを知れば

なり』

と、彼は眞に使徒パウロの如く

『神に賴りて生き、又動き、又存在することを得し者』

であつた、故に彼は勿論靈魂の不滅を信じた、固く固く信じた、彼は曰ふた、

『余は知る余は不滅なることを、

余は知る余の生涯の軌道は大工のぶんまはしに由て限らるゝ者にあらざることを、

余は知る余は小兒が燒箸を以て暗中に畫く火の輪の如くに消え去る者にあらざることを、

余は知る余は尊嚴なることを、

余は自己を辯明する爲に心を苦めず、又人に了解せられんとせず。

余の往くべき所は定まれり、確實なり、主は其處に在まして余が彼と同等の權利を以て彼に來るまで余を待ち給ふ、

大なる仲間、我の戀慕ふ眞實の戀人は其處にあり』

靈魂の不滅と神の愛とに就て是れより强く曰ふことは出來ない、此確言を發し得る者は基督教會内には滅多に居らない、是れは議論では無い、實驗である、實驗に止らない、確信である、世には教會の大監督、大神學者にして此確信の半分をも有たない者が澤山居る。

彼の天然觀

以上は彼の宗教觀である、然らば彼の天然觀は如何であつた乎と云ふに、彼は哲學者ではなかつたから彼に組織立つたる天然觀はなかつた、彼は彼の標語として

"Ensemble, Evolution, Freedom"

『合一、進化、自由』

を掲げて居るが故に、彼の天然觀は進化論である乎と云ふに必しも爾うではない、彼は天然の無限大なるを知りしが故に之を小なる博物館に於けるが如くに彼の小なる腦裏に收めんとは爲なかつた、彼は唯天然を愛した、非常に愛した、熱切に愛した、深刻に愛した、彼の天然觀は寧ろ天然愛であつた、故に天然は彼の熱愛に報いんが爲めに彼女の秘密を彼に傳へた、ワルト・ホイットマンは激甚の愛を以て天然の衷心に逼り其戀愛を贏ち得た者である。彼の有名なる一句は左の如き者である、

『小兒あり、其手を擴げ我に草一莖を齎して曰く草とは何ぞやと、我れ如何にして小兒に答へんや、我は之に就て彼が知るより以

上を知らず。

我は想ふ、之れ我が天性の旗號なるべし、希望の綠の色にしあれば。

或ひは想ふ、之れ神の手巾なるべし、香水滴らしたる紀念品にして故意と途に遺されし者なるべし、其隅に持主の名は記されて我等は其、誰のものなる乎を知るを得べし。

或ひは想ふ、之れ「廣き國にも狹き國にも、均しく萠芽し黑人の中にも亦白人の中にも同じく發生す」てふ意味を通ずる萬國共通の象形文字なるべし。

我は更らに思ふ、之れ墓塲に生ふる長くして美くしき頭の髮なるべし。

心して我は汝を手に取るべし、汝、波打たる頭髮よ、
汝或ひは若き人等の胸より生へし者ならん、
我れ若し彼等と識りしならば、多分彼等を愛せしならん、
或ひは老いたる人よりなる乎、或ひは母の懷より生れて間もなく取り去られし赤子よりなる乎、

而して今又此所にありて汝は母の懷たり』

即ち、詩人は曰ふのである、我は草に就て小兒が知るより以上を知らず、或ひは是れ希望に傾く我が天性の旗章ならん、或ひは是れ我が戀人なる神が我に拾はしめんとて、其情を單めたる香水を注ぎ、其名を署して途上に遺せし愛の紀念品ならん、或ひは其、地上到る所に生ふるを見れば、是れ萬國共通の表號文字ならん、或ひは更に深く思へば、是れ墓塲に生ふる頭髮にして、或ひは愛すべき青年男

女の胸より生ふる者もあらん、老いたる人より生ふるもあらん、或ひは母の懷より生れて間もなく取り去られし愛兒の身より生ふるもあらん、而して今や草其物が母の懷の代用を爲して愛兒を墓を護りつゝありと、實に深くもあり優しくもある、草一莖に詩人の智識と信仰と愛と情とが罩めてある。

ホ井ットマンが天然を歌ふに方り、彼に何にも大山に登り、大海に臨み、大瀑を聞き、大河を眺むるの必要がなかつた、彼は景色を探らん爲めに無用の旅行を企てなかつた、此點に於て彼は天然教の宗祖、英のウォルヅヲスと全く赴を異にして居る、彼は選んで湖水地方に隱退しなかつた、フィラデルヒヤ市外、カムデンの地、デラウエヤ河の流れ廣くして深く、大船巨舶の往來する邊に在りて彼は充分に天然と交はり得た、天然とは何も必しも山中の湖水ではない、

巖上の櫻草ではない、空天高く啼く杜鵑ではない、夜な〳〵頭上に輝く星も天然である、路邊に生ふる草も天然である、河も天然である、空氣も天然である、馬も天然である、鼠も天然である、而してホ井ットマンは平民詩人であつたから、彼は平民の眼に接する天然に就て歌ふた、天然を愛すると稱して人を避けて山に入り、獨り風月を樂む詩人を彼は心より賤んだであらう。

彼曾て家に在て過雁一行、聲を放て空天を翔るを聞いた、

『巨雁一群を率ゐて暗夜を走る、

彼は曰ふ、「ヤホンク」と、而して我を招くが如し、

淺慮の人は之に意味なしと言はん、然れど我は耳を傾けて聞く、

而して其心意と場所との冬天高く彼處に在るを知る』

是れ確かにウォルヅヲスの杜鵑に寄する語に優さるの言葉である、

飛雁は叫鳴を發して詩人を上に招きつゝある、而して詩人は耳を澄して其の招待の聲を聞て、其招待の心意と場所との

『冬天高く彼處に在るを知る』

と曰ふ、家に座して雁行を聞て天國を懷ふとは此事である。

『蹄鋭き北方の大鹿、戸口の鴨居に座する猫、鷄雛、野犬、
吭々と唸る牝豚の其乳房に犇と取附く豚兒の一群、
半ば張りたる翼の下に雛を隱まふ七面鳥、
我は見る彼等と我との中に舊き同一の法則の働らくあるを』

天然物に對する同情は是れより以上に達することは出來ない、獅子とか麒麟とか、鳳凰とか、孔雀とかに對する頌讃の辭ではない、犬と猫と豚と家禽とに對する同情の歌である、而かも彼等と我との間に同一の天則が働らいて居ると云ふ、人、賤しき乎、禽獸、貴き乎、

詩人は勿論言はんと欲した、「神の造りし禽獸は人丈けそれ丈け貴く
ある」と。

詩人は又曰ふ、

『我れ我足を以て地を踐めば萬感一時に湧出し、
我れ之に就て語らんと欲するも我が力及ばず』

と、彼は洵に昔時のモーセと均しく神前聖き所に立ちつゝあつたのである、此地は到る所、彼に取ては神聖であつた。

彼は馬に對して曰ふた、

『牡馬の雄大なる美形我が愛撫に應じて我が前に立つ、
其額は高く眼の間は廣し、
艶々したる靭やかなる四足、地を拂ふ尾、
猛威輝く眼、尖りたる耳、

我れ其上に跨るや其鼻孔は開く、
其整備せる四足は我等が馳走する時歡喜を以て震ふ。

然れども我は暫時汝を用ふるのみ、我は直に汝を放免す、牡馬よ、
我れ汝を追越し得るに何ぞ汝の足を藉らんや、
我は起つも座するも汝よりも遙かに迅く走るを得るなり』

勿論思想を以てゞある、詩人の思想は電光よりも迅し、名馬も及ぶべきでない、彼は馬を見て喜ぶ、然し之に乘りて遊ばんとはしない、若し走るの要あらんか、座するも能く龍馬を追越し得べしとのことである、天然を愛して之を濫用せずとは此事である。

彼は又曰ふ、

『余は信ず草の一葉は星の萬年の工に劣らざることを、

蟻も完全なり、砂の一粒、鷦鷯の卵子、皆等しく完全なり、
蟾蜍は至上者の最上の食物なり、
地を匍ふ懸鉤子は天の客間を飾るに足る、
如何なる機械も我が手の一關節に及ばず、
頭を低れて草を嚙む牝牛はすべての彫刻物に優さる、
鼠一疋は億萬の無神論者を踉蹌かすに足るの奇跡なり』

天然と親交を結びし者は此詩を解するに難くない。

然しホイットマンは鳥や獸を歌ふのみにては滿足しなかつた、彼は大宇宙を歌はんとした、天文學を歌はんとした、地質學を歌はんとした、彼の歌は直に近世科學を襲ふた、雄大なる彼は星雲說と進化論とを詩化せんとした。

『我れ我が母より生れ來りし前に我に萬代の守護ありたり、

我は胎卵たりし時より未だ曾て眠らざりし、何物も我を埋沒する能はざりし、

我がために星雲は軌道を離れざりき、
時を經て地層は我が上に積まれたり、
廣大なる植生は我に滋養を供せり、
巨大なる怪獸は我を其口に咬へて注意を以て我を育めり。
すべての勢力は我を完成し、我を樂ますために使はれたり、
而して今此所に在て我は我が强健なる靈を以て立つなり」

此歌の意味を知らんと欲せば星學と地質學とを學ばなければならない、スペンサー氏の綜合哲學も、ジョン・フィスク氏の宇宙哲學も詩人の此言を敷衍證明せし者に過ぎない、雄大と言はん乎、深遠と言はん乎。

彼の國家觀

次ぎは彼の國家觀である、而して彼の國家なるものは北米合衆國である、哲學者ならざる彼には彼の空想に畫かれたる理想の國家なる者はなかつた、彼はトマス・モーアのやうに大洋の彼方に理想の國家を夢想しなかつた、又博士スタインのやうに先づ國家なる辭に定義を下して然る後に其發達を論じなかつた、直ちに天然を愛して天然を謳ひしホイットマンは直ちに彼の國を愛して其愛を歌に現はした、彼に取りては理想の國家は後に在るべき者ではない、今、在る者である、北米合衆國は人類六千年間の歴史を繼承して、世界の責任を擔ふて起つた者である、彼の國なるが故に貴いのではない、人類の希望を充たすべき國なるが故に尊いのである、宇宙的なる彼は自己

のために自國を愛しなかつた、又國のために國を愛しなかつた、世界のために、人類のために、萬物發展のために、宇宙進行のために彼は彼の北米合衆國を愛した。

『青きオンタリオの岸に立ちて、
我れ過ぎにし戰爭と復りし平和と、復たび歸らぬ去りにし人を
懷ひし時に、
儼しき風丰の巨大なる人影我前に現はれ、我を捉らへて曰く、
我がために亞米利加の丹心より出る詩を作れよ、勝利の歌を唱へよ、自由の曲を奏せよ、
然り、汝、此處を去る前に之よりも更らに力ある、民主國の產出の劬の歌を謳へよ』

是れ彼が南北戰爭終りし後に、獨りオンタリオの湖邊に立ちて亞米利加の靈より聽きし聲である、「民主國の產出の劬の歌」、產出に伴ふ苦痛、苦痛に伴ふ希望、希望の供する奬勵、之を歌ひし者が彼の愛國歌である、彼は合衆國を帆船に擬らへて言ふた、

『走れよ、善く走れよ、汝、民主國の船よ、
汝の積荷は價貴し、現在のみならず、
過去も亦載せて汝の艙中に在り、
汝の運命のみにあらず、西大陸のそれに止まらず、
全世界は約めて汝の龍骨の上に浮ぶ、
「時」は汝に由て進航す、前の國民は汝に由て浮き又沈む』

北米合衆國は恁かる國である、全世界を約めたる者、其粹を萃めたる者、エジプトも、バビロニヤも、アッシリヤも、ギリシャも、ローマも、其後に起りたる舊世界の國々もすべて彼女に在て浮ぶとの

事である、而して世界歴史を究めし者は詩人の此言の決して誇大の言でない事を知る、北米合衆國は一時に、他より飛び離れて獨りで起つた國ではない、其建設者はワシントン、フランクリン、ジェフソンに止まらない、英國のコロムウェルも其建設に與つて力がある、佛國のコリニーも其建設者の一人である、伊國のサボナローラも其土臺石の一個である、然り、更らに歴史に遡りて稽ふれば猶太のパウロも羅馬のシーザーも、希臘のペリクリスも皆な悉く合衆國の建設に貢献したる者である、ナイル、ユウフラテス兩河の岸に起りし文明が西漸して太平洋岸に達せし者が北米合衆國である、西洋文明の最後の繼承者たる此國は其華であり、粹であるべきである、故にホイットマンは米國詩人の天職に就て言ふた、

『亞細亞と歐羅巴の不朽の詩人は既に其業を終へて他界に去れり、

今や一事業の尙ほ存するあり、彼等すべての上に出る事是なり』

是れ傲慢の言であるやうで爾うではない、弟子は常に其師に優さるべきである、詩にして若し古人に學ぶべき者ならん乎、詩は詩ならざるべし、詩は希望である、預言である、先見である、回顧を主とする支那人の詩が、詞にのみ巧にして、人を奮起せしむる靈能に於て缺くるあるは人の善く知る所である、詩は善く其國を代表する、詩人を知て能く彼を產せし國を知ることが出來る、文豪トローは彼ホイットマンに就て言ふた「彼は民主國其物なり」と、北米合衆國を身に體せる彼は大膽であり、自由であり、不羈であり、不遜、無禮と見做さるゝ程までに獨立であつた、彼が自己を世に紹介せる言に左の如き者がある、

『ワルト・ホイットマン、小宇宙なり、マンハタンの市民たり、

躁々しく、肉肥え、情強く、食らひ、飲み、繁殖す、
感情家に非ず、人の上に立たず、又人を離れて立たず、
不遜にも非ず、亦謙遜にも非ず』
洵に模範的米國人其儘である、平等は米國の精神である、すべての人をして「人」たるまでに進歩せしむること、夫れが米國の天職である
と。

彼の同情性

以上の叙述に由て彼が如何に情の深い人であつたかゝ分かる、犬や猫や豚や七面鳥に對して「同一の法則の我と彼等との間に働らくを見る」と曰ふた人は、人に對して深き同情を懷いたる者であつたとは言ふまでもない、實に『草の葉』の全篇に渉りて何物に對しても彼の同情

は充ち溢れて居る、是れが彼を第一流の詩人となしたる主なる理由である、彼に優麗の文はなかつた、玄妙の哲學はなかつた、該博の智識はなかつた、然れども彼に深き同情があつた、是れが彼をして詩人たらしめた、實に偉大なるは同情である、深遠なるも亦同情である、同情は人の心を開く鍵である、天然の秘密を探ぐる光である、是れありて多くの缺點を償ふことが出來る、是れなくして文字も智識も死物である、ワルト・ホイットマンは特に同情的詩人である、詩神の心を授かつた者である。

『太陽が汝を拒絶するまでは我は汝を拒絶せざるべし』

是れ彼が世のすべての不倖者、異端の徒、救濟の希望なき者として人に棄てられし者に對して發せし言である、世の失敗者に對しては彼は言ふた、

『余は高調の音樂を執て來る、喇叭と太鼓とを執て來る、
余は世が戰勝者と見做す者のためにのみ曲を奏せず、
余は亦戰敗者のために、亦戰場に斃れし者のために樂を奏す。

汝は人の言ふを聞きし乎、戰に勝つ者は福ひなりと、
余は言ふ、負ける者も亦福ひなりと、そは勝つも負けるも同じ
精神に由ればなり、
余は斃れし者のために打ち又鳴らす、
余は余の口を喇叭に當てゝ最高最莊の曲を彼等のために奏す。

敗れし者萬歲！
海に軍艦を打沈められし者萬歲！

戰に敗れし將軍萬歲！克服されし勇者萬歲！
世に知られたる最大の勇者に劣らざる無數の知られざる勇者萬歲！』

余輩は近世の文學に於て劣敗者に對する是よりも深い同情を知らない、成功者の謳歌を唯一の業とする今の文學者流は此詩人の前に立て慚死すべきである。

彼が老兵二人の葬儀に會し、彼等を弔ふ辭に左の如き者がある、時は日曜日の夕暮、日は西に沒し、月は東に昇る、樂隊は太鼓と喇叭とを打鳴らし悲曲を奏しながら柩を送る、

『噫、死を送る進行曲よ、汝は我に樂し、
噫、銀色を以て輝く月よ、汝は我を慰む、
噫、我が二人の兵卒よ、墓に下らんとする老兵よ、

我は汝に何を與へん乎。

月は汝に光を供す、
喇叭と太鼓とは樂を供す、
而して我心は、噫、兵卒よ、老兵よ、
我心は汝に愛を供す』

然り、米國の南北戰爭に於ても他の戰爭に於ての如く、戰死者に音樂を供し、讃辭を供し、名譽を供する者は多かつた、然れども詩人のみ能く愛を供した、彼は他の人の供せざる者を供した、彼は心よりする愛を供した、國に欲しき者は斯かる詩人である。

ホ井ットマンの同情の秘訣は左の言葉に於て現はれて居る、

『余は傷を負へる人に彼が如何に感ずるやを問はず、余は自身傷を負へる人と成る』

他人の苦痛を畫くのではない、自身痛み苦むのである、彼の粗雜なる文字が強く讀者の肺腑を突くは全く是れがためである。

彼の人生觀

而かも斯くも同情に富みし詩人は自身は徹頭徹尾歡喜の人であつた、彼に若し人生觀なるものがありしとすれば之を嬉々的人生觀と稱するより他に言葉はない、余輩が彼の詩を悅ぶ所以は主として此奪ふべからざる彼の歡喜性に於て存するのである。

『心に喜び意に適ひて余は生路を歩む、
余は歩行の處を擇まず、余は唯其善なるを知るのみ、
全宇宙は其善なるを表顯す、

過去と現在とは其善なるを表顯す、
如何に美はしく且つ完全に動物はあるよ、
如何に完全に此地はあるよ、其最微のものに至るまで、……
善と稱ばるゝものは善なり、亦惡と稱ばるゝものも等しく善なり』

然らば彼に取りては惡なる者は無かりし乎と云ふに、彼は勿論惡の存在を認めた、然し、善のための惡であつて、惡に呑まるゝための善ではなかつた、彼は言ふた、

『余は默想の中に宇宙を逍徉して、小なる善が徐々として不朽に向つて進み行くを見る、
又大なる惡が自から跡を絶ち、消え且つ失せ行くを見る』

善は小且つ弱なりと雖も不朽に赴き、惡は大且つ强なりと雖も自滅

に終る、善は慕ふべきである、惡は恐るべきでない、全宇宙の赴く所は善である、惡ではない、惡の存在は嬉々的人生觀の抱懷を妨げない、故に詩人は又言ふた、

『地は善なり、星は善なり、彼等の附屬物は皆な善なり』

ホイットマンは又カーライルのやうにすべての善き事を過去に於て見んとしなかつた、彼に取りては「善き時」とはコロムウェル時代ではなかつた、ワシントン時代ではなかつた、今在ると、彼は言ふた、黃金時代は過去に於て無かつた、

『億々年を經て我に來りし此時、
之に優さりて善き時はなし、而して今は其時なり』

而して此地を樂み現在を樂しみし彼には死の恐怖は寸毫もなかつた、彼には實に死なるものはなかつたのである、此地が既に生物たる以

上は、死して此地に葬られるのは生に呑まれるのである、故に彼は言ふた、

『余は余の身を塵に委ぬ、余の愛する草となりて復たび生え出んがためなり、

若し汝、復たび余を見んと欲せば之を汝の靴の下に探れ』

注意して路を歩めよ、汝は余を踐まんも計られずとの事である、必ずしも天に昇るの要なし、此の地既に神の樂園なりと、世に樂天主義ありと雖ども ホイットマンのそれの如く嬉々たり又快々たるはない。

米人の待遇

米國人は彼等の中に降り來りし此絶大の詩人を如何にして迎へし乎と云ふに、侮蔑、嘲笑、誹謗、罵辱を以て迎へた、千八百五十五年、詩人が自から植字して『草の葉』の第一版を出せし時に、賣れしもの僅かに十二冊、而して進呈本の多數は其中に罵辱、嘲誚の言を記入されて著者に突戻された、曰く是れ野蠻人の文字なりと、曰く泥酔者の詐言なりと、普通の人でありしならば此待遇に失望して永久に筆を收めたであらふが、嬉々的人生觀を懷く吾人の詩人は少しも之を意に介せず、其年の夏は暑を海濱に避け、宇宙の大氣に接して更らに大に養ふ所あり、凉風至りて都市に歸り來るや、彼は記して言ふた。

『余は余自身の定めし法式に由り余の詩的企業を以て前進するに決心せり』

詩人は元來勇者である、筆執る纖弱き文人ではない、亞米利加の丹

心を歌はんとせし詩人ワルト・ホイットマンは米國人の冷遇に辟易しなかつた。

然し二三の米國人は彼の天才を認めた、而して其一人はコンコルドの哲人エマソンであつた、其他の一人はエマソンの友人なるトローであつた、リンコルンも亦後に『草の葉』の著者に會して、

『彼は洵に人らしき人なり』

との評を下した、偉人は偉人を知る、然り、偉人のみ能く偉人を知る、米國の社會も教會も此大詩人を措て問はざりし時に、當時の米國の精華たりし此等の三人は此人に於て天來の大預言者を見た。

預言者は其故郷其家の外に於て尊まれざることなしと云ふ、ホイットマンも預言者の數に漏れず、彼の故國の米國に於て疎まれて洋の彼方の歐洲に於て尊まれた、英國に在てはカーライル、ラスキン、

コンウェー等の一團は彼の天才と偉大とを認めた、テニソンの如きも早く彼を迎へ終生彼の友となりて存した、テニソンが毎年、年改まる毎に太西洋の西岸にある彼の詩友に送りたる短信は左の如きものであつた、

『敬愛する老いたる人よ、君よりも更らに老いたる余は君に新年の慶賀を贈る』

佛國に在てはブランク夫人、彼を彼女の國人に紹介し、獨逸に在てはライグラート氏同一の任に當り、伊國に在てはネンチオーネ氏、彼をダンテの國人に紹介した、而して最後に彼に耳を傾けし者が彼の國人たる米人である、彼はカムデンの寓居に在て老いて老を養ふに資なく、僅かに友人の寄贈に由て其寡欲なる生活を續けた、而して千八百九十二年三月二十七日、彼何の惡意を挾むことなく、一點

の恐怖を懷くことなく、嬉々快々の聲を遺して、此世を去るや、彼の葬式を司りし者は基督教會の監督に非ず、又其牧師、傳道師、神學博士に非ずして、無神論者の首魁と見做されしロバルト・インガーソル其人であつた、彼「無神論者」のインガーソル、詩人の貧と病に苦むを聞くや、フィラデルヒヤ府に詩人慰撫のための演說會を開き、八百餘弗を醵金して之を彼に贈つた、其演說の一節に曰く、

『ワルト・ホ井ットマンは大なる理想を夢みたり、大なる眞理を語りたり、莊嚴なる思想を言ひ表はせり、諸君が「草の葉」と題する書を讀まるゝ時に諸君は太古時代の自由を感せらるべし、太初の聲を聞くなるべし、元始の大詩人の聲を聞くなるべし、大濤と大風の聲の如き元始的の聲を聞くなるべし』

而して此の壯大の言を發して後二年、詩人の終に世を去るや、同一

の「無神論者」は同一の雄辯を揮ひ、此大詩人を頌揚した、其終結の一言は是れである、即ち

『偉人は死せり、偉大なる米國人は死せり、此共和國の最上の市民は今や死して吾人の前に在り』

而して無神論者に由て葬られし詩人ホ井ットマンは無神論者でなかつた事は前に述べた通りである、彼は今の米國人に解せらるゝには餘りに偉大であつた、彼と彼の國人との間に天壤も啻ならざる差があつた、彼は絕對的自由を慕ふに彼等は名義のみの自由を愛する、米國の少女は歐洲の貴族に嫁して爵位を以て己れの名を粧はんとする、米國の宗教家は己れの信仰を他人の上に强ひて傳道の成功を誇らんとする、米國民全體は階級制度を廢せしと稱して、今や人類が未だ曾て見しとなき程の貧富の階級を自己等の中に作り出した、斯

かる民に取りてはホ井ットマンは確かに「野蠻人」である、「泥醉せる狂人」である、余輩は米人が此詩人を斥けたことを怪まない、斥けられし詩人の名譽である、斥けし米人の大恥辱である。

然しホ井ットマンは毫も彼の國人を恨まなかつた、彼は世に解せられざるを詩人當然の運命と信じた、國と詩人との關係に就て彼は左の如くに言ふた、

『國に詩人現はるれば國は終に進んで彼を接るに至るべし、此事に關し憂慮を懷くの要なし、

詩人が詩人たるの證明は彼が彼の國を消化せし如く彼の國が彼を消化するまでは必ず成立せざるべし』

然り、米國人も終に此詩人を解するまでに進歩するであらふ、然し詩人は國民の理想まで下るべきではない、國民は詩人の理想まで上るべきである。米國人が其詩人ワルト・ホ井ットマンの理想に達する時に彼等の中に軍艦增設の聲は上らざるべし、異人種排斥の說は立たざるべし。而してミシシピは靜かに海に向つて流れ、金に代て眞の神は拜せられ、平和と恩寵とは兩洋の間に溢れて、全世界は米國人に由て理想の樂土と成るであらふ。

テニソン

千八百〇九年八月英國にて生まれ
千八百九十二年十月英國にて逝く

歌の供給者。

或時我れに思想絶えたり、我は歌ふに歌なく、語るに言辭なきに至れり、其時人あり來りて無情の劒を以て我心を刺せり、我はいたく苦痛を感ぜり、我は悲哀の聲を揚げたり、然るに視よ、彼が殘せし傷口より思想の玉泉は流れ出で、我が信仰の眼は開け、讃美の歌は再び我唇に還りたり、其時我は痛める我傷口を抑へながら云へり「無情なる深切なる敵人よ汝は我に新しき歌を供せり」と。

（内村鑑三著『所感十年』より）

アルフレッド テニソン

希望的宇宙觀

洪水と地震に破壞さるゝ天然、獅子と毒蛇の狂暴を許す天然。
貧困と敗頽に破壞さるゝ社會、惡虐と放肆の横暴を許す社會。
外を見て、無明の暗黑と永久の冬を感ずる時、我等の心も荒れはて、懷疑の大きな圓が胸一杯になる。

おぼつかな谷は櫻のいかならん
嶺にはいまだかけぬ白雲。

あゝ嶺にも谷にも花は無いのであらふか、併し花はいつかは開くに相異ない。

CROSSING THE BAR

Sunset and evening star,
And one clear call for me!
And may there be no moaning of the bar,
When I put out to sea.

But such a tide as moving seems asleep,
Too full for sound and foam,
When that which drew from out the boundless deep
Turns again home.

Twilight and evening bell,
And after that the dark!
And may there be no sadness of farewell,
When I embark;

For tho' from out our bourne of Time and Place
The flood may bear me far,
I hope to see my pilot face to face
When I have crost the bar.

今更に春をわするゝ花もあらじ
やすく待ちつゝ今日もくらさん。

我等の理性も感情も爛漫たる櫻花の春を待ち望むのである、そして
霞まずばなにをか春と思はまし

まだ雪きえぬみよし野のやま。

然り、雪は消えぬ、けれどもすでに天地は霞んで來た、紫色にたなびける霞は春の今や全地に望まんとする前兆である、此世は永久の冬ではない、やがて來るべき光明の春を告げ知らす兆が既にある、それ故我等は大なる希望を抱く、夜既に五更、暗黑の魔鬼はやうやく力を失はんとして東天既に三分の紅を呈して居る、絶望する勿れ、大希望を抱け――詩聖テニソンの信念は一言にして云へば之れである。

詩人としてのテニソン

アルフレッド・テニソン(Alfred Tennyson)は、千八百〇九年英國リンカン州に生れた、彼の詩人としての天才は早く既にあらはれて、十八歳の時詩集を出版して世を驚かした、かくて年をとるに隨つて彼の詩はます〳〵上達し、數多の名作を發表して遂に詩壇の名星となり、千八百五十年には有名なブラウニング夫人を壓して欽定詩宗に任せられた、千八百九十二年十月五日、齡八十三にして彼は大なる希望を抱いて終に世を去つた、其辭世の詩に歌つた通り、死の河口を出でゝ無限の大海に乘り出でたのである、そして其の望んだ通り「水先案内を面の當りに看」たことであらふ。

テニソンは、どちらかと云へば、むしろ技巧の勝つた詩人である、

其詩句の整齊、優美、温雅なる實に朗々吟詠すべきものがあつて、聲調の美古今獨歩といふべき程である、其評判の高かつたのも大に此點に因るのである、しかしながら其詩の内容から云ふても、たとへウヂーズヲスには及ばぬとするも、矢張り第一流に位するものであると自分は思ふ、彼にはウヂーズヲス程の詩的直覺性はないけれど社會の首導者としての大なる卓見と深き思索とがある、ウヂーズヲスに依て清き別世界に高めらるゝ我等は、又テニソンに依て光明の春野に連れ行かるゝ。

テニソンの詩才は實に多方面であつて、抒情詩、叙事詩、短詩、劇詩等各方面に亘り、或は天然を歌ひ哲理を談じ、或は古話を語り信仰を述ぶ――實に巧なる詩人である、しかし我等は其技巧の裡に隱れた彼の希望と信念を見落してはならぬ、自分は彼の宗教詩を少しく讀んで、詩人の信念のある所を窺つて見たい。

追想歌

第一に有名な追想歌(In Memoriam)の大意を述べて見たい、これは其親友アーサー・ヘンリー・ハラムの死を悼んだ詩であつて、千八百五十年に公にせられたものであるが、初て稿を起したのは二十年も前のことである、先づ其序歌の一部を譯す。

強健なる神子よ、不朽の愛よ、
我等爾の顏を看しことなけれども、
證明し得ぬに、信じて、
信仰により、信仰のみによりて、爾を抱く。
……

爾は我等を塵の中に棄てざるべし、
爾は人を造りしも、人は其理由を知らず、
唯其死ぬべく造られしにあらぬを思ふ、
然り爾は人を造れり、爾は正し。

爾は人にしてまた神なり、
爾は最高、最聖の人なり、
我等の意志は
これを爾のものとするために、我等のものたるなり。

我等の小軀は短時保つのみ、
短時保ちてやがて消ゆ、

まことに夫は爾の光明の破片のみ、
オ、主よ、爾は遙かに夫にまさる。

我等は知る能はず、唯信仰を有つのみ、
知識は見ゆる物に限らるゝなり、
されど我等は其の爾より出でしを信ず、
暗中の光なり、それをして發達せしめよ。

心思と靈魂とが相應じて
前にまさる調和の樂を奏せんために
知識をして日に日に發達せしめよ、
而して敬虔の益々我等の中に住まんことを。

原詩は實に莊嚴優美なる一大音樂である、これを成るべく原意に近く譯さうとして、金玉を變じて砂礫とするの拙劣を愧づ、唯其中に出づる詩人の思想には充分の注意を拂つて頂き度い。

彼の重に活動した十九世紀の後半は思想界の過渡時代であつて、舊信仰すたれて新信仰未だ現はれず、人は古き教義の誤謬を知つて未だ新らしい人生觀を抱かず、スペンサー、ハックスレー等の不可知論(Agnosticism)は大なる勢力を得、ダアヰンの進化論出でゝ益々動搖は甚しく、懷疑の暗雲低く垂れて、人心徨々として安んぜざる有樣であつた、此時代に詩を以て人を導く預言者の位置に立つた彼は、一面之れ等懷疑思想に同情すると共に、他面信と望とを高唱しなくてはならなかつた、否、元來彼自身が疑の中に信を抱き、暗黑の中に光明を認る人であつた、大なる光明の希望——これが彼の詩となつ

てあらはれた、我等は上掲の詩に於て充分に詩人の信念を知ることが出來る、「證明し得ぬに、……信仰のみによりて爾を抱く」といふのは信である、「爾は我等を塵の中に棄てざるべし、……唯其死ぬべく造られしにあらぬを思ふ」といふのは望である。

『追想歌』の序歌の次は先づ懷疑を以て始る、人生の悲痛哀哭に對する疑、死に對しての絶望は強く現はれて居る、次のやうな句が處々にある。

死は普通であるといふことは私の悲を少くしないで却て增す、あまり普通にすぐる！　死別の苦のない日とては人の世に一日もない。

空想の希望や恐怖の下に、あゝ、悲痛はます〳〵深くなる、そして其悲痛は私の生命の根柢を涙の中に溺れさせる。

かくて第五十六節に至る。

おゝ、されど吾等は信ず、
悲痛、罪惡の最後の結果
疑惑、流血の最後の結果が、
どの道、善なることを、

又信ず、萬事が目的を有ちて進むことを、
神が凡てを完成し給ふ時には
一の生命も破壞せられず
又放棄せられざることを。

……

見よ我等は何事をも知らず、

唯善が終に――永き後――終に
凡てに來り、
冬の悉く春となるを信ず。

實に大なる希望ではないか、此「悲痛、罪惡」、「疑惑、流血」に充つる暗黑の現世に、愛の神を信じて光明の望を抱き、「冬の悉く春となる」のを確信することの出來るのは實に不思議にして又感謝すべきことである、知識上よりのみ現世を眺むる時誰か懷疑の襲ふ處とならざるものぞ、併し我等は知識上に未解決の問題を澤山殘したまゝで、或信仰と希望とを抱くことが出來る、そして、かくして我等の根本問題の解決され、もしくはされつゝある時は、知識の懷疑はあれども無きが如き者となる、――あゝ、生命の破滅に終らざること、善が最後に來ること、之は我等の本性の要求する希望である。

第五十五節に曰ふ。

自然は我等に悲想を起さしむ、
さらば神と自然とは相容れざるか、
自然は種を保たんと勞して
個々の生命を少しも顧みざるに似たり。

されば われ、各處に
自然の所爲の秘義を考へ、
其が數十の種子より
往々にして唯一つを育つるを見、
確乎として歩みし處にたぢろぎ、

重き憂鬱苦悶を負ひて、
暗黑より神に上る
大世界の祭壇にひれ俯すなり。

かくてわれ信仰の弱き手を伸ばし、探り、
塵埃秤糠を集め、
萬物の主と感ずる者に叫び、
おぼろげに、大なる希望を抱く。

知識の探究に依て得し重き憂鬱苦悶を負ふて祭壇にひれ伏し、弱い信仰の手を伸ばして萬物の主に叫ぶといふのが我等の探るべき道である、宇宙の學理的探究に依て安心を得た人は一人もない、レオ・トルストイでもフィリップ・モウロでも之を數十年やつて、唯ます〳〵

疑惑煩悶の增すばかりであつた、實に「書を知るは憂を知るの初」である、知識のみのパリサイ人には、「神よ罪人なる我を憐み給へ」と云ふ天眞の聲を發することは出來ぬ(路加傳一八の九―一四)、されば主よ、

願くは汝の光と汝の眞理とをはなち、
我を導きて、其聖き山と
其帷幄とにゆかしめ給へ、
さらば我れ神の祭壇にゆき
又わが喜び喜ぶ神にゆかん。
(詩篇四三の三、四)

第百六節に於ては除夜の鐘にことよせて新興の希望を歌ふ。

舊を逐ひて新を迎へ、
雪を超えて鳴り響け、うれしき鐘よ、

逝く年をして逝かしめよ、
虛を逐ひて眞を迎へよ。

此の世を去りし人々を悲む
死別の哀傷を逐ひ出せよ、
富者と貧者の確執を逐ひやり、
萬人に救拯をもたらせよ。

衰滅に瀕せる舊說と
かの因習黨爭を逐ひ、
美なる風習、淸き法則と共に
高き生活の道を迎へよ。

窮乏、勞苦、罪惡を逐ひ、
時代の無信冷固を逐ひ、
……眞理と正義の愛抱を迎へ、
萬人をして善を愛せしめよ。
……過ぎにし無數の戰を逐ひやり
平和の長き年月を迎へよ。
……自由勇敢の人を迎へ、
、、より大なる心情、、より仁慈の手を迎へよ、
也の暗黑を逐ひ

來らんとするキリストを迎へよ。
野に山に里に響きわたる除夜の鐘は、過ぐる暗黑を弔ふ挽歌であつて又來る光明を迎ふる歡聲である、凡ての惡は次第に去て凡ての善は次第に來る、光明は照々乎として前途を照らす、希望の宇宙——
これがテニソンの信念である。
尙ほ彼は信仰の上にのみ立つの要を歌ふ。
されど我れ、我精神に住し
夢を見て之を眞となす。
たとへ夢を見るが如くであつても、それが己れに取つて眞であれば宜しいといふのである、我等の夢——希望——は「智慧を覓む」る「ギリシャ人には愚なる者」であるが、此夢を「神の智慧」と愛抱することを誰か妨げ得るものぞ、我等は夢を見る者を憐れまない、夢を見得ない

者を憐む。

信仰一度び眠りし時は、
我は「信ずる勿れ」との聲を聞き、
岸の絶えず崩れて
神無き深海に落つるを聞けり。

信仰のない時は凡てが暗黑である、けれども、
其時我は泣く赤兒のごとくなりき、
されど父の傍に立つを知りて泣く赤兒なりき。

之は信仰である、又、
暗中より手出でゝ
天然を通して人を造れり。

之も信仰である。

『追想歌』の最後の節は歌ふ。

永久に活ける愛の神、
一の神、一の法、一の素、
全宇宙の動く目的たる
遠き未來の神聖なる一事。

『追想歌』は百三十一節の長詩で、右の外にも色々の思想を含んで居るが、之が根本思想に於ては先づ大凡上述のごときものであると思ふ、由て次に移る。

古哲人

古哲人(The Ancient Sage)はテニソンの詩中最も哲理的のものであるといふ、先づ大體こんな風に書いてある。

キリストの時より千年も前のこと、或賢哲が己れの町を棄てた、一人の富める青年煩悶に勞れはてた顏をして、手に一卷の詩文を携へて此賢哲の後についた、哲人は山の巖窟の前に到てふり向いて青年に語つた、此巖窟からは清水が潺々として流れて盡きない。哲人は『此豐かな水は暗い巖窟から流れ出づると見ゆるけれど、實は其源は雲に隱るゝ彼方の巔にある、否、雲の造られ雲の雨となる高い天にある、――力は高處より來る』など、話す。

青年は答へる『ナイチンゲールの美しい歌はナイチンゲールより出たものと思ふ、夏の空の美と野の綠との裡に或力があるとは思へない、大能者と云ふものは解らない』と。

青年の語は此世の知識を代表するものである、成る程知識の眼から宇宙を見て疑惑の中に彷徨するのは當然である、美しい衣服をつけ

た青年の顏にある悲寥の影は、知識で塗りたてた社會の表にたゝよふ荒涼の姿である、「大能者無し」といふ聲は實と影とを取り違へた人間の深罪の響である、虛を眞に代へた人間の墮落の音波である、此青年は人間共通の苦悶を訴ふるのである、我等は此青年に自己の影を見ねばならぬ。

哲人は靜かに答へる。

汝大能者の聲を聞かんと欲して
汝の衷に深く分け入り
靜かに默想する時、
或は之れを聞き得べけん。
而して汝は知る能はざれど、
もし賢くば、恰も知れるが如く

これに據りて安住するを得ん。
蓋し知識は湖上の燕のみ、
水面の影を看又動かせど
未だ水中深く潜りしことなし。

……

もし大能者にして
「汝が最も眞なりと想へる萬物」より退かんか、
汝の全世界は陰の暗中に入りしごとく
消え失せて跡なからん。
大能者は人の衷に在り又天然の中にある、しかし之を探るには事物の外觀だけを究る知識の能く爲す處ではない――之がテニソンの考である。

青年は哲人に答へて大能者を證明することの出來ぬを云ふ、哲人は曰ふ、『まことにその通り大能者を證することは出來ぬ、しかし同樣に汝は汝の住む此世界を證することは出來まい、汝自身が物であるか心であるか、或は物と心を兼ぬる者なるかを證することは出來ぬ、又汝が生命の滅、不滅を證することは出來ぬ、凡て證明する價のある程の貴い物は、ありと證することも出來ぬ、ないと證することも出來ぬ』と說いて、進で信仰の尊貴を述べる。

信は論難激爭の中にもよろめかず、
賛否の衝突に當りて輝く、
最惡の中に最善の閃くを見
日輪は夜にのみ隱るゝを感ず、
信は嚴冬の樹の茅に夏の來るを知り、

花の落ちざるに果實の滋味を思ふ、
歌はざる卵に雲飛の樂を聽き、
人が「迷景よ」と歎く處に泉を見る。
信仰は萬事を其の光明の側に於て見るものである、幽暗の中に黎明の光輝を見、冬の夏となり、花の實となるを望む大希望を抱かしむるものである――といふのがテニソンの考である。

尙二三の問答の後、青年は『凡てが夜のやうに暗いのに、先生が地は美なりと語られても無効である』と云ふ、老先生は答へる。

子よ、世は悲痛墳墓に充ちて暗く
人は泣いて天の無情を叫ぶ、
されど、まことは暗黑は人の衷にあり。
夜の戸は晝の門ならん。

汝もし生來の瞽者、聾者にして
いま忽ち醫やされたりとせば、
世界の靈光と美聲とに
いかに歎美の聲を擧ぐるぞや。
あはれ我等は瀕死の族なれど
唯空幻ならぬを知る、
而して空幻の岸に立ちて、
終に最大智が空幻の壁を退けて
我等に世界の全美を示す時を待つ。
世界を暗く見るものは、顏を光明に背けたものである、實は暗黑は人の衷にあるのである、見よ陽春既に地に臨まんとし、歡喜は野に山に充ち、鶯は軒端に近く天の妙音を傳ふるではないか、我等は幽

暗の魔鬼を心中より逐つて、世界の春と共に喜び、而して來るべき世界の全美を待たねばならぬ。

青年は「人の悲喜哀樂は畢竟大海の一小波に過ぎぬ」と歎く、哲人は之を慰めて云ふ。

されど大海の一小波も
其大海の渺茫として際涯なきを知り、
己れは常の姿なけれど、
絶えず大海の動靜に伴へるを感ず。

青年は尙ほ色々と訴へる、哲人は飽くまで希望の宇宙を謳ふ、其終の語はこれである。

恩惠の山に登り
其處より遠く眺めなば、
山又山の彼方
夜の陰の領を超えて
高天永久の曙光の
靈光の山を打つを見ん。

然り、恩惠の山に登れよ、恩惠の山に登れよ。

短篇の詩

以下少しく短篇の詩を紹介する、我詩人の思想を知るに足る短詩は澤山あつて、茲に擧げ盡すことは出來ぬ。

彼が青年時代の詩に愛と死 (Love and Death) といふのがある、愛の神がバラダイスを歩いて居ると、死の神は楪の樹の下を歩いて之に逢ひ「此處は余の道だから立ち去れ」と云ふ、愛の神は立ち去つたが、其

時死の神に斯う告げた。
今は汝の時なり、
汝は生の陰影なり、
樹の日光を浴びて黑影を投ぐると等しく、
大なる永遠の光の中に、
雄偉なる生は死の影を造る、
樹枯るれば陰も亦去る、
我は永久に萬物を統べん。
死は一時であつて生は永遠である、死は影であつて生は實である、
青年にして早く既に生命と愛の恒久性を歌ひしテニソンの偉なる哉。
テニソンが五十四歳の時の作**深處より** (De Profundis) の末節に曰ふ。
爾の名の讃美すべきかな、ハレルヤ！

無窮の理想！
無限の眞實！
窮り無きの人格！
爾の名の讃美すべきかな、ハレルヤ！

我等は我等の無なるを感ず、
そは萬物は爾なり、爾の中にあり、
我等が己れを或物と感ずる時は
その爾より來れるを思ふ。
我等は知る、我等は無なり、
唯、爾我等を扶けて茲に在らしむ、
爾の名の讃美すべきかな、ハレルヤ！

晩年の詩

我等は最後に詩人が晩年の作を見よう。

八十歳の時出版された詩集の中に無限大(Vastness)と一進化論者に依りて(By an Evolutionist)と劇(The Play)とがある、『無限大』は内村鑑三氏著『愛吟』にあり、其の現世の不完全を列擧して、

渾が墓に終るとならば
人の世に在る何故乎、
無限に吸はれ死に呑まれ
意味なき過去と消えんために乎。

『愛吟』の譯を借る)

と疑つて、而も最後に愛と生とを歌つて光明に一轉化する處、正に

テニソンの代表的作物と云ふべきであると思ふ。『一進化論者に依りて』は、人類が下等動物より進化して今日に至つたといふのであるならば、更に高き生活の希望を抱いて、洋々たる前途を望むべき由を歌つた者である、進化説は益々詩人の希望を輝かし、八十の老翁に青春の望を抱かせたのである。

『劇』は假に世界を劇にたとへると、

今の世は其第一幕目で、舞臺は悲痛に充ち、諸君は心を腐らせるであらう、しかし暫く忍んで貫ひ度い、作者は第五幕目位に至て第一幕の意味を充分に示すであらう。

といふやうなことを歌つて居る、宇宙の進展について樂觀し、前途に光明を認るのである。

千八百九十二年十月、死後に公にせられた詩は、多く詩人が晩年の

希望を歌つたもので最も注意すべきものである。

曙(The Dawn)は現世の尙ほ曙であつて日中でないことを述べ、從て暗黑の勢威は未だ甚しく衰へざれど、やがて日中の光明の宇宙を蔽ふことを歌つたものである、第四節に曰ふ。

曙なり、晝にあらず、

……

我等は人類の晝を去る遠ければ、

尙ほ二千萬年の前程を有つ、

足れり、人類發達のための時や。

人類の完成(The Making of Man)も略々同樣の思想を述べたもので、人類完成の希望を美しい言葉に表はして居る。

疑惑と祈禱(Doubt and Prayer)は歌ふ。

爾の杖に打たるゝ時、(爾とは神を指す)

我が罪は屢々我逆運を叫び、徒らに泣く、

我等は祖先の踏みし道により

悲哀を通して罪より爾に至る。

愛が我が父たり兄弟たり神たることを知る前に、

理性をして我を去らしむるなく、

芝地をして我死より

爾の生ける花と草を生ましむる勿れ。

信仰(Faith)**靜かなる聲**(The Silent Voices)**神と宇宙**(God and the Universe)皆同じやうな希望を歌つた生き〳〵した短詩である、**クラレンス公の死**(The Death of the Duke of C.)の中には、次の句がある。

死の顏は生命の太陽に向ふ、

唯其影が地を暗くするなり、
死の眞の名は「前進」なり。

……希望を有ちて悼め。……

吾人は最後に詩人の辭世**砂洲を過る**(Crossing the Bar)を歌はう、(稿者曰、砂洲は河口にある砂洲を意味し、砂洲を過るといふは死を通過して來世の大海に乘り出づるを云ふ)。

あゝ日沒、明星見ゆ、
我を喚ぶ聲のあざやかさ！
われ大海に乘り出づる時
砂洲よ悲曲を奏するなかれ。

ゆらめく潮も眠るがごとく
滿々として音なく泡なし、
無限の深海より來りしもの
再び家に歸る時は。

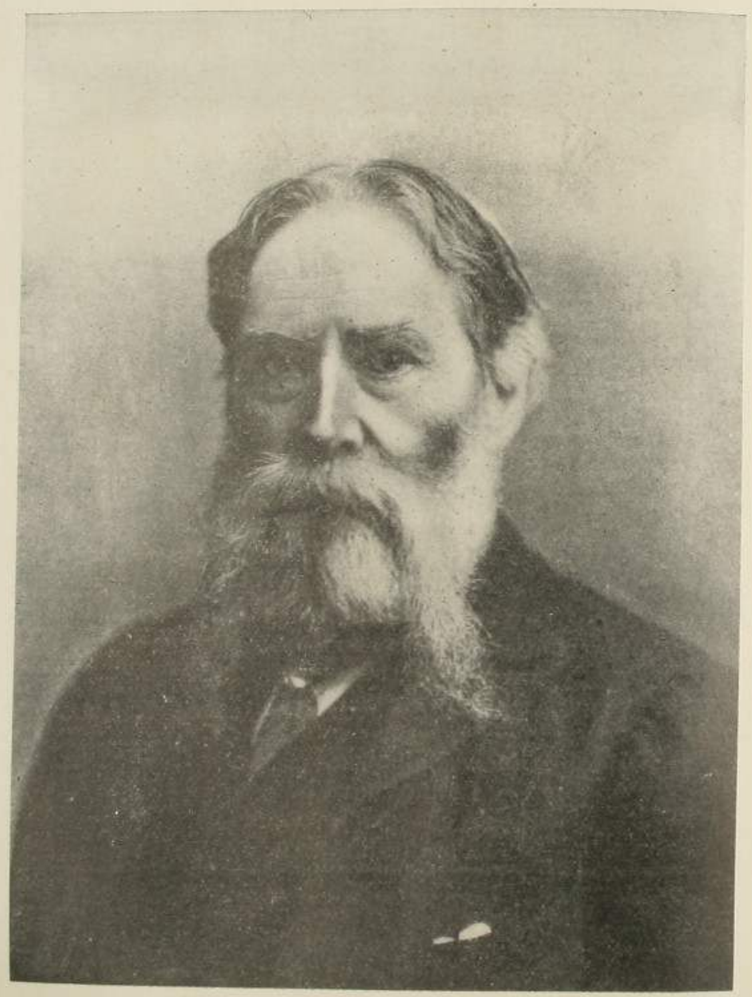
あゝ黃昏、晩鐘聞ゆ、
かくて後暗黑！
われ船に乘り込む時
別離の悲哀なかれかし。

時空の限界を超えて
大潮は遠くわれを運ばんも、

われ一度び砂洲を過ぎなば
我水先案内を面の當りに看ん。

詩人時に八十三歳、物欲既に全く失せて、十九世紀特有の知的懷疑のまた彼を惱ますなく、罪の世を去らんとして、洋々たる自由の大海の前途に限なきを望む、そして「信仰のみに依て抱きし」水先案内を「面の當りに見ん」ことを期して、泰然として死に對す、偉にして且壯なりと云はねばならぬ、吾等も亦罪の世に罪の生涯を終へん時は、此老詩人に倣つてかくのごとき光明の希望を抱き度いものである。

ロエール



千八百十九年二月米國にて生まれ
千八百九十一年八月米國にて逝く

ローエルが早年の歌

米の詩人ジェームズ・ラッセル・ローエル(James Russel Lowell)が早年時代の作にかゝる愛と生命との歌數篇を左に掲げて、彼を知るの一端となす。

愛の歌第一

或る譬話 (A Parable)

預言者、聖き丘にのぼり
巔に達して疲れ且足痛みぬ。
彼はさゝやけり、
「神は地を離れしも尙ほ此處に居給ふ。

THE FOUNTAIN

Ever in motion,
　Blithesome and cheery,
Still climbing heavenward,
　Never aweary;

Glad of all weathers,
　Still seeming best
Upward or downward,
　Motion thy rest.

Full of a nature
　Nothing can tame,
Changed every moment,
　Ever the same.

Ceaseless aspiring,
　Ceaseless content,
Darkness or sunshine
　Thy element;

Glorious fountain,
　Let my heart be
Fresh, changeful, constant,
　Upward like thee!

「古への凡ての預言者の父よ、
爾もはや人と語らざるか？
むかし爾に選ばれし人のごとく
我れ忠實に爾に事へざりしか？

「聞け！　わが祖先の神よ、
見よ！　われぞ謙遜の心情を有てる。
爾の慈愛に縋りて我は歎願す
爾の僕に只一つの休徵を賜へ。」

彼は首をたれて
祈願の應答いかにと待てりき。

雷の響は起らざりき、
一語の空氣を動かすもなかりき。

さはれ、彼が待てる間に
一叢の苔蘚はひらき出で、
巖のかたき胸よりは
やさしき菫おどり出でき。

預言者は云へり「神よ、謝す、
われは頑執にして聾者なりき、
聖き山を仰ぎ望て
預言の能を求めし我は。

「今日も爾は古へのごとく、
自由に爾の兒等と語るなり。
謙遜と愛と忍耐とは
尙ほ時を支配するなり。

「われ若し己れの本性に立ち
見ゆる小事に信を抱きしならば、
爾みづから我を求めて
我靈の翼を解放し給ひしものを。

「さるに、われ唯人を支配せんとて、
空しく休徵と異能を求めたりき。

死ぬべき人に勝らんと渴望ひて、
われは土塊にも劣れりき。

「われ此旅に出づる前、
家を出でんとて腰に帶せし時、
我小娘は走り來りき、
我の心より愛する彼女は。

「彼女の手には花ありき、
そは今觀る此花にいと似たり、
彼女は之を我家の戸口に拔きて
我に持ちきたりしなりき。」

註。預言者は道義の人なりき、聖潔の人なりき、然れども彼は己れの聖きに誇る人にして、謙遜の美德を知らざりき、隱れたる愛の生涯を思はざりき、彼に自重あまりありしも自卑はあらざりき、これ彼が誤謬の第一。

預言者は又徒らに道を遠きに求めたり、地を離れて天に近く之を求めたり、然れども道は近く彼の傍にあり、卽ち「一叢の苔蘚」にあり き、「やさしき菫」にあり き、「我家の戸口に」ある花にあり き、彼の心內にあり又彼の近隣にあり、彼の日々の卑近なる生活にあり、然るに彼は之を忘れて遠きに道を求めたり、これ彼が誤謬の第二。

預言者は又徒らに休徵と異能を求め、神秘の光輝にあこがれたりき、

ホレブ山中「棘の裏の火焰の中より」神の聲を聽かんと願へり、シナイ山巔「雷と電及び密雲」の下に神の姿を拜せんと望めり、宇宙天界の秘

密を探る登高の一路こそ唯一眞正なる信仰の態なりとせり、然れども彼は愛と謙遜と忍耐の生涯に眞生命のあるを知らざりき、而してかくの如き生涯が彼の靈を解放することを思はざりき、神秘の探求もとより棄つべきにあらず、されども實行的生涯を忘れては果して何の要ぞ、然るに預言者は脚下を忘れて唯天を仰ぎたり、之れ彼が誤謬の第三。

愛の歌第二

月の曲 (The Moon)

我靈は月出ぬ前の
海の如くなりき、
我れ自らの力に怖ぢて、

安んぜず、落付かず、
渺茫無際の中にうめきぬ。
淺瀨にむなしき泡を立てゝ、
地の牢獄をかこちつゝ、
もだへて何物にか憬るれど、
不安の中にまた退くのみ、
月いまだ出でざればなり。
その唯一の聲は漠たる呻吟のみ、
無言の苦しき叫びのみ、
全き孤獨の中にありて、
そは唯目的なき追求に住みき。

わが靈もこれに似たりき。
されど、不安の重荷にうめける時、
ある美はしきものゝ聲、
おぼろげなる豫兆を叫びぬ、
さはれ、其聲柔く、細く、低く、
悲哀を消すほどの歡喜を齎さゞりき。
かくて、我にもあらで
銀の月の足に
その潮を送りて
靜かに横はる海にも似て、
汝、守護の月が上れる時
わが靈は靜寂に住みき。

今や、浪いかに高く
波濤いかに荒れ狂ふも、
強健且つ永久なる愛の法則は、
確實に且つ平和に我を導きて、
氣息の如く靜かに且つ自然にして、
生死を通ほして靈の深處を動かす。

註。海は其れ自身に於て暗黑なり、力に溢れて浩蕩又澎湃、動き且うめけど暗黑は依然として暗黑なり、月は光明なり、月一度出でゝ暗海を照らし、月の光明に浴して海は初て明かなり。靈も亦かくの如し、他より光明の照すなくば暗黑と不安の結晶のみ、而して光明一度來らんか、靈の活躍や眞に不可思議なり、此世の「浪いかに高く、波濤いかに荒れ狂ふも」、靜寂太古の湖のごとし。

而して此光明は「强健且つ永久なる愛の法則」なりと、詩人の言や深し、曾て或人歌つて曰へり、『己れ獨り天に達する道を求めて神秘の奥殿に探求の歩を運ばん者は、進歩はせんも天上に達する難し、常に愛に終始するものは、遠くさまよふ事はあらんも、神終に彼を天上に擧げん』と、味はふべきかな言や。

愛の歌第三

祖國は何處 (The Fatherland)

眞人の祖國は何處ぞや？
彼の偶然生れし國なるか？
向上の靈は小なる限界に
拘束せらるゝを欲せんや。

然り！　彼が祖國は青天の如く、
廣く且つ自由なるべし！

彼の祖國は自由の在る處
神が神たり人が人たる處のみか？
靈、故郷を愛するなれば
彼は尙ほ廣きを求めずや。
然り！　彼が祖國は青天の如く、
廣く且つ自由なるべし！

人情が歡喜の花環を着くる處、
人情が悲哀の械にくるしむ處、

人靈がより眞、より正なる
生活をなさんと努むる處、
こゝに眞人の生地あり、
これぞ世界大の祖國なれ！

唯ひとりの奴隷が哀哭する處、
一人が他人を援くる處、
（兄弟よ、かゝる生得權を感謝せよ）
此の處こそ汝の所有なれ、わが所有なれ！
茲に眞人の祖國あり、
これぞ世界大の祖國なれ！
眞人の祖國は「神の國」なり、而してこれ彼の偶然生れし國にあら

註。

ず、日本にあらず、英吉利にあらず、獨逸にあらず、たとへ此世に完全無缺の理想國ありとても、これ眞人の祖國にあらず、「神の國」にあらず、「神の國は顯はれて來るものにあらず、此に視よ彼に視よと人の言ふべきものにあらず」(路加傳十七の廿一)、有形的に之を此地上に見んと欲す、愚や及ぶべからず。「神の國は汝等の裏にあり」、人が愛の小さき行爲をなす處、人が眞正なる生涯の實現に努むる處、これぞ神の國なれ、眞人の祖國なれ、「神の國は飲食に非ず、唯義と和と聖靈に由れる歡喜にあり」(羅馬書十四の十七)と、イエスの精神、パウロの精神は亦實に我詩人の精神なり。

生命の歌第一

眞の教會 (The Church)

我は英國教會の儀式を好む、
僧侶と民とが靜かに
嚴肅なる祈禱書を讀むを
われは聽き且つ看るを好む。
讃美と祈禱の歌の
うるはしき抑揚を聽くを好む、
空氣をふるはする
オルガンの深き叫びを好む。

千年の間歌はれし聖歌を
いま茲に聽くを好む、
古への物の姿は

曲に喚び起さるればなり。
窓硝子も莊美の色彩に
突如と輝くと見ゆ、
豊かに又あざやかに
光は聖壇になが れ入る。

その時我れつぶやく「寔に神は
喜んで此處に住み給ふ。
これぞ彼の愛すなる
獨子の殿堂なり」と。
さはれ、之のみが神の敎會なりとの
その敎條を聞く時は、

神は之よりも純なる拜殿をもてりと
われは我衷に思ふ。

彼の敎會は人間の建てし會堂にあらず、
オルガンに慄ふ屋宇にあらず。
凡て愛らしき物の中に
彼の愛あり、彼の住家あり。
動かぬ單純なる信賴の外に
一の敎條をも知らずして、
彼の造りたる萬物を
愛しむ靈の中に。

彼の教會は普遍的愛なり、
其の中に住む人は
己れのために罪を洗ふべき
何等習俗の犧牲を要せじ。
正直なる生涯の歌は
其會堂の中に溢れ、
青空をわなゝき降る
天使が琴の音にまがふ。

此處に禮拜する人は
祈禱書を用ふる要なし、
各人の目眸は聖歌なり、
各人のことばは祈禱なり。
靜かに且つ清き眼のなかに
彼等の勤行はあざやかに見ゆ、
芳はしき心より
日々の香烟は立ちてやまじ。

註。儀式の美なるは藝術的に美なるにあり、故に之を看、之に加はりて喜ぶは文藝繪畫の技巧に讃歎の聲を發するに等し、鑑賞の喜びなり、感情の滿足なり、これ虛を以て實に代ふるもの、まことの信仰茲にあるなし。生命は人造の建物にあらず、禮拜堂は神の天然にあり、人事の實際にあり、愛と正直なる生涯と、單純なる信頼と實際的なる生活と——茲に生命あり眞の教會あり、生命の動き信仰の生きて働く處——茲に眞の教會あり。ガリラヤ湖畔に擧がりし生命

原始の叫びをして、堂屋の中に閉ぢ籠めらるゝなく、大空と清風の中にあらしめよ。

生命の歌第二

遺産 (The Heritage)

富者の息は土地を讓り受け、
高樓と黄金を讓り受け、
白き纖手をゆづり受け、
寒さに堪へず古衣をまとひ得ぬ
柔き肉をゆづり受けぬ。
まことに是れ、
喜び受け得ざる遺産なり。

富者の息は煩勞をゆづり受けぬ。
銀行破産せんか、工場燒けんか、
株券空に歸せんか、
白き纖手はあらたなる
生計を彼に得しむる能はじ。
まことに是れ、
よろこび受け得ざる遺産なり。

富者の息は欲求をゆづり受けぬ、
かれの胃は美食をもとむ。
手に汗して働ける家僕等の

喘ぎを彼は平然として聞く、
かくて安樂椅子にありて倦む。
まことに是れ、
喜び受け得ざる遺産なり。

貧者の息は何を讓受しや？
强健なる筋肉と剛毅なる心、
鞏固なる體と更に鞏固なる精神。
彼は二手を用ひて
有用なる勤勞技藝に勵む。
まことに是れ、
王者も喜び受くる遺産なり。

貧者の息は何を讓受しや？
小事に從ひて滿たさるゝ希求、
勤勞に由りて贏ち得る地位、
業務より生るゝ滿足、
うたひつゝ勞働に從ふ心。
まことに是れ、
王者も喜び受くる遺産なり。

貧者の息は何を讓受しや？
貧より學びたる忍耐、
悲痛來るも之れに堪ゆる勇氣、

薄倖者の感謝を受くるなる
愛憐慈悲の情。
まことに是れ、
王者もよろこび受くる遺産なり。

＊　＊　＊　＊

お丶富者の息よ！
汝に他に劣らざる一の勤勞あり。
博き慈善は白き纖手を
より白くすとも汚すことなし、
これ汝の土地よりの最上の收穫なり。
これぞ眞に、
富みて受くべき遺産なれ。

お丶貧者の息よ！
汝の境遇を輕しむるなかれ、
唯の富貴の境遇に汝より大なる憂あり。
勤勞のみが靈性をかゞやかし
休息をして芳美且つ快和ならしむ。
これぞ眞に、
貧しくて受くべき遺産なれ。

二人は同じく六尺の地を嗣ぎて
終に地中に在りて等し。
二人はともに神の愛兒にして、

此世の善生涯のその後に
天の大なる遺産を嗣ぐ。

これぞ眞に、
生涯を費して讓受べき遺産なれ。

註。富者の子は物を多く有して生命を有せず、幸なるが如くにして不幸なり、貧者の子は物を有せずして生命を有す、不幸なるが如くにして幸なり、生命は勤勞にあり、努力にあり、業務にあり、勞働にあり、勇氣にあり、愛憐にあり、何ぞ富者の子を羨まんや。

然れども富者の子にも生命なきにあらず、彼もし慈悲博愛の人とならば以て生命ある人たり得ん、境遇は完く人を滅すものにあらじ。而して生命の最眞最上なるは墓の彼方にあり、富者も貧者も六尺の墓を占つや等しく、永遠の生命に浴するや等し、此世の境遇の如きまことに小の小、微の微なるものと云ふべし。

生命の歌第三

泉の詩 (The Fountain)

日光のなかに、
ひかりに充ちて、
おどりつゝ、閃きつゝ、
朝より夕まで。

月光のなかに、
雪よりも白く、
花の如くゆらめきつ。

風の吹くときに。

星光のなかに、
飛沫を跳らせつ、
眞夜中にも歡びて、
晝もよろこびて。

常にうごき、
快然また欣然、
なほ天を指してのぼり、
決して倦まず。

凡ての天候に感謝して、
歡び且たのしむ、
上方にまた下方に
動くは汝が休息。

何物にも屈せぬ
天性に充ちて、
たえず動きて、
曾てかはらず。

不斷の渴仰、
不斷の滿足、

汝の要素は
暗黑にあらずば光明。

榮譽ある泉よ、
願くはわが心も、
汝のごとく新鮮にして躍動し
不變にして上昇せんことを。

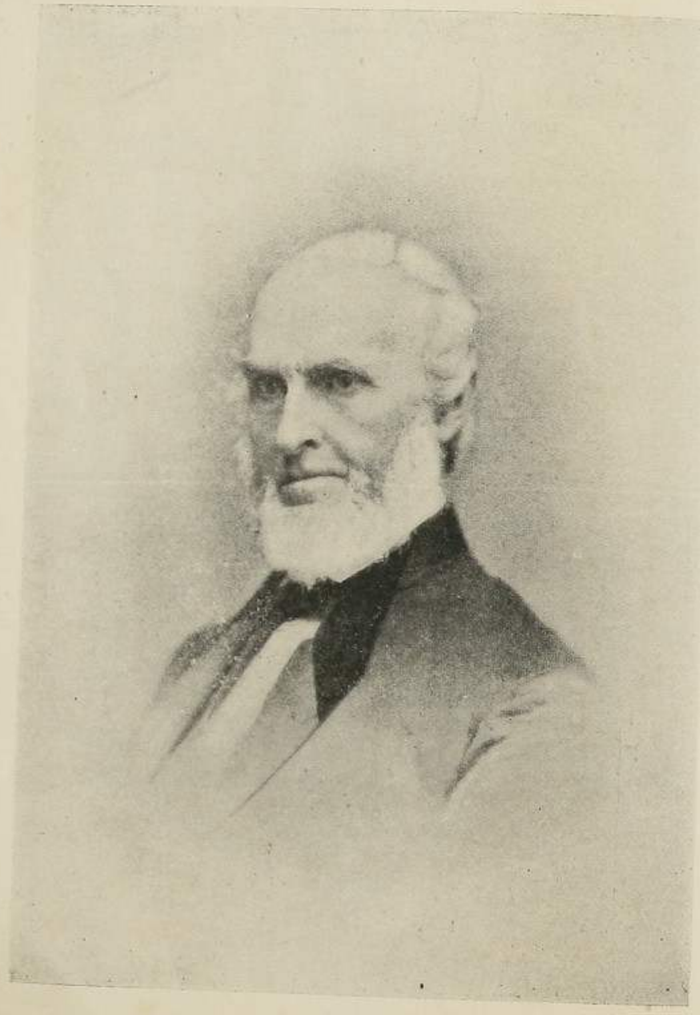
註。泉の生命に充てるを見よ、感謝と歡喜と、躍動と滿足と之に溢る、願くは我等生命の泉に汲み、自ら小なる生命の泉たらんことを。此詩甚だ短なりと雖も、八節、三十二行、數百字、一節として剴切ならざるはなく、一行として清新ならざるはなく、一字として雄勁ならざるはなし、其一節、其一行、之を我等の精神生活に應用して

効果極て多きを思ふ。

＊　＊　＊　＊　＊

奥妙比ひ難きの哲理、深遠測るべからざる眞理、靈性眞底の叫びに至りては、我等に敎ふるに別に其人あらん、詩人ローエルも人の子なり、全きを彼に望むべからず、然れども若し愛と生命と勞働と滿足と謙遜と平和の福音を求めんとせば、われ等彼に赴くべきなり、敎へらるゝ所多からん。

ホヰッチヤ



千八百〇七年九月米國にて生まれ
千八百九十二年九月米國にて逝く

勿論文士ならぬ彼（クロムエル）の手紙であるから、文學的に立派なものではない、彼大革命中に、爲すべき處置、執るべき手段等について記した事務上の書翰である故、たとへ不明の點や修辭の拙があつても……素朴の語の裏に一種の高大なる「沈默の顯智」が閃いて居る、語より偉い精神が生動して居る、雄辯を以て表はさればならぬやうな智は小智である、詩を云ふでなくて詩を爲す人が詩人である、雄辯なき勇氣信念は勇氣信念なき雄辯に遙かに勝る。

（畔上賢造譯カアライル氏『クロムエル傳』より）

グリーンリフ　ホヰッチヤ

其生涯

ジョン・グリーンリフ・ホヰッチヤ(John Greenleaf Whittier)は、千八百〇七年九月十七日、北米合衆國、ニューイングランド——英州ハーヴヒルに生れた、世界に「自由」を齎すべき使命を有せし彼は、世界に「自由」を供せし第十九世紀てふ記憶すべき新時代の初現に於て、自由の國北米合衆國に生れたのである、彼は大偉人リンカンに先だつこと二年前、自由の戰士ヰルヤム・ロイド・ガリソンに後るゝこと二年、彼よりも大且新なる思想を有せしワルト・ホヰットマンに先つこと實に十二年にして、呱々の聲を擧げたのである。

THE FISHERMEN

In the darkness as in daylight,
    On the water as on land,
God's eye is looking on us,
    And beneath us is his hand!
Death will find us sooner or later,
    On the deck or in the cat;
And we can not meet him better
    Than in working out our plot.

Hurrah!—hurrah!—the west wind
    Comes freshening down the bay,
The rising sails are filling—
    Give way, my lads, give way!
Leave the coward landsman clinging
    To the dull earth, like a weed—
The stars of heaven shall guide us,
    The breath of heaven shall speed!

祖先は英の清教徒であつて、暴王を上に頂きて心靈界の暗黑其極に達したる十七世紀に於て、信仰の自由を得んがために當時の理想鄉たりし米國に航した、此人をトーマス・ホ井ッチャと呼んだが、其息ジョーセフはクェーカー派の信徒の女を娶つた、又詩人ホ井ッチャの祖父は佛蘭西亡命者の子孫を娶つた、かくして清教徒の剛骨と、クェーカーの敬虔と、佛人の熱血とは、我詩人の血液に混在した、此事を知つて彼の詩を誦するときは、吾人は思ひ半ばに過ぐるのである。

家富まざることゝて、詩人は少時より畠に働くことを常とした、學校へは僅か入つたのみである、「年少にして私は畠で働かせられ、又母のために使ひ歩きをした、私の母と云ふのは、普通の家事の外に、家族の衣る麻布や毛布を紡いだり織つたりするに急がしかつた」、之れが彼の幼時及び彼の家庭の有樣であつた、併しながら彼は純潔なるホウムに於て純潔に育つたのである、彼の傑作と呼ばれて居る雪中生活(Snow-bound)は當時の自分の生活を書いたものである、「新英州の家庭生活の樂しき有樣が目に見えるやうに書いてある、當時の米國は今の米國と違ふ、ピューリタンの風は米國に存して居た、「新英州はピューリタンの國であつた、茲に少きより勞働と感謝の生涯を送り、其Snow-boundの中に描かれてあるやうな天然に圍まれて育ちしホ井ッチャの、後年あのやうな詩人となり得たのは當然である。

幼きより英の詩人バーンスを愛讀したと云へば其感化を受けたに相違ない、勿論聖書は日々彼を敎へたものであつた、幼より詩才があつて、初て追放者の樂立(Exile's Departure)と云ふ詩を書いて、井ルヤム・ロイド・ガリソンの發刊して居た自由新報(內村鑑三氏著『愛吟』ロイド・

ガリソン参照に投書した、ガリソンは此詩を大に賞し更に投稿を依嘱した、彼の喜び知るべきである。

廿歳の頃、ガリソンの盡力で或新聞の記者となり、其後色々の新聞に轉じ、詩人としてのホヰッチヤの名は廣く知らるゝ程になつた。

千八百三十三年、彼は亞米利加奴隷廃止協會を助くることゝなつたが、之よりして彼は自由の戰士となつたのである、ペンを以て米の奴隷廃止を促した人としては、彼は有名なストウ夫人(アンクル・トムズ・キャビンの作者)やガリソンと共に其功を分つべきである、彼が之がために詩を作つたことは數へきれぬ程多いが、又小冊子なども度々發行して奴隷存置を攻撃した。

奴隷廃止論は當時なほ甚だ不人望な議論で、多くの人の反對を買うたけれども、人々はホヰッチヤの主義あり定見あり且誠直剛毅なる

に感じて、千八百三十五年には彼を州會議員に選んだ、彼は益々奴隷廃止のために戰つて屢々騒民の迫害を受けたが、依然として口にペンに其叫びを斷たなかつた。

晩年彼は退隱して親戚の家に住んで居たが、此頃より彼は多く信仰上の詩を賦し出した。

千八百九十二年彼は遂に此世を去つた、純潔、率直、謙遜で、神と人とを愛し、日々善行をなすを以て目的とせしホヰッチヤは、喜んで、望んで、感謝して、此世を去つた、奴隷廃止は彼と同じ精神の偉人リンカンに因て成された、彼の詩人としての名聲は晩年既に高かつた、獨身なりし彼は子女を身の周圍に觀るの悦びを知らなかつた、けれども、其我等の主(Our Master)に於て、

Immortal Love, forever full,

Forever flowing free,
Forever shared, forever whole,
A never-ebbing sea.

不朽の愛よ、永遠に充ち
永遠に滾々として流れ、
常に頒ち、常に全し、
絶えず潮みつる海よ。

と吟ぜし其「不朽の愛」の御許に、

To turn aside from Thee is hell,
To walk with Thee is heaven!

爾(神)よりはなるゝは地獄なり、
爾と共に歩むは天國なり。

と歌ひつゝ此世を後にしたであらう。

修養

前にも云ふ通り、彼は學問の人ではなかつた、靴直を人から習つて、それによつて金を獲て、暫くの間學校へ通つた位である、彼の詩から深奥なる知識を見出さうとする人は失望する、學資が無くて高等の知識を獲られなかつたのではあるが、由來彼自身學問と云ふものを重んぜぬ、彼は唯普通の語を以て普通の事實を唱たのみである、彼は平民の友であつて、平民の感情を歌つたのである。併し彼は「天然」と「人」とを師として修養した獨得の思想家である、彼が住家の附近は、ニューイングランドの新英州の代表的風景の場所であると云へば、彼が天然より享けた感化の程は推して知られる、又彼が少時より勞働して夙く既に人生の哀傷慘苦を嘗めたことを考ふれば、彼が生きた社會、

生きた人に接して己を磨いたことが解る、彼は**素足の兒**(The Barefoot Boy)と題する詩の中にかく歌ふて居る。

彼は學舍にて知識を得ず、
野の蜂が朝の嬉戯を學び、
野の花が何處に、何時、咲くかを知り、
鳥の飛翔を知り、
森の住者の住居を知る。
如何にして龜が甲殼を擔ふかを知り、
如何にして山鼠が穴を掘り、
鼹鼠が其巣に入るかを知る。
駒鳥が其雛を育つる法、
鶺鴒が其巣を造る法を知る。

＊　＊　＊　＊　＊

想ふ、書物と日課とを避けて、
自然は彼の探ぬる凡百の事に答ふ。
手に手を執つて彼は自然と歩み、
相對して彼は自然と語る。

右の如くにして彼は「素足の小兒」を讃美し、更に進んで、自分の幼時自然より感化を受けた有樣を叙べて居る、實に彼の歌ふて居る通り、「栗鼠は吾(即ち彼)をなぐさめんために遊び、小川は吾(即ち彼)を喜ばせんために笑」つたのである。

此詩に依て、吾々は彼の書籍より獲し知識を貴まずして自然より受けし感化を貴ぶ自恃を知ることが出來ると同時に、彼の少年時代の修養の有樣をも察することが出來る。

勿論彼とても全然無學の人ではなかつた、少年の時、家には廿冊位の書籍があるのみであつて、傳記や旅行記などを借りる爲に數哩を歩いて往つたことは常であつた、家にある書物と云ふのはクェーカー派の信者の日記のやうなものが重であつた、又聖書の感化の大なりしは云ふに及ばぬ、彼とても全然知識欲の無い人間ではなかつた、後年には色々書物を讀んだに相違あるまい、さりながら彼は同時代の英雄リンカンなどゝ均しく、「書籍の兒」にはあらずして「天然の兒」であつた。

奴隷解放の詩

彼は奴隷解放論の戰士であつた故、奴隷のために歌つた詩は澤山ある、米國の詩人はどう云ふものか英國の詩人程詩句に巧でない、テニソンやスヰンバーンのやうな綺麗な詩を米國に見出すことは出來ない、ウヂルズヲスの如きは平易の語を以て作つた方であらうけれど、其詩句の精美莊高なるは米國詩人の企て及ぶ所でない、ホヰッチャのはホヰットマンのやうなのとは大分趣を異にして、キチンと詩らしく齊つては居るが、とても詩句の美しい、技巧に優れて居ると云ふ部へは這入らない、併しながら其奴隷について歌ひし詩には、實によく彼の同情がたゝよつて居り、又彼の自由のために戰ふの意氣が表れて居て、吾等は之を讀んで或は潸然として泣き或は慨然として憤り、又奮然として戰ふの意氣を生ずるのである、吾人はいま其二三について見よう。

或詩(Stanzas)と云ふ詩は、

鎖にてつながるゝ我等の同胞、

光明と正法との國に存する奴隷、
嘗て自由のための戰の起りし野に
鞭の下に苦む奴隷。
と書き出して、
起てよ自由のため。
汝等の祖先の見しごとき
人相殺す戰にあらず、
光榮と罪惡の伴ふ戰にあらず。
「眞理」及び「愛」てふやさしき武器を以て、
活ける神の大能によりて、
鎖を破り、桎梏を除き、
壓制の鞭を地に打ち碎け。

云々と結んである、其全體の勇壯なる調子は惰夫をして起たしむるの慨がある、特に平和の戰を主張し、たとへ自由のためと雖も干戈に訴ふることを不可としたのは、其見識の時代に先つこと一世紀なるを思はざるを得ない、亞米利加人にして詩人の言に深き注意をしたならば、彼の怖るべき血と火の南北戰爭は起らずして濟み、彼等を代表する偉人リンカンの光輝は尙一層を增したであらうと思はれる。

自由民の歌 (Song of the Free) に於ては、彼は新英州民に對し其特有の自由主義のために戰ひて、南方の壓制者を打ち破るべきことをすゝめて居る。

信者なる奴隷 (The Christian Slave) に於ては基督敎信者なる一黑人が奴隷として賣買せらるゝ有樣を記し、多くの宗敎家が之を冷視する、

否むしろ奴隷存置に贊成する醜態を攻擊し、言々痛切を極めて居る、僧侶を罵るの語に曰く、

全能の神よ、
僧侶てふ鼠賊の何時迄爾の祭壇に立つにや、
彼等が祈るとき爾にあぐる手は血に汚れ、
傲れる額は惡を以て滿つ。

と、

又奴隷の慘澹たる苦痛の聲が天に上るの狀を記して曰く、

おゝ、甘庶の野より、
沼地の米田より、奴隷商人の穴藏より、
黑き奴隷船のむさ苦しき船底より、
鎖につながるゝ勞れはてし奴隷の群より、
嗄れし、物すごき、强き、苦痛の聲は、

登りて神聖なる天を充たして曰く、

「何時迄ぞ、おゝ神よ、何時までぞ」

と、何と痛切なる調ではないか、彼は奴隷に代つて天に其苦痛を訴へて居るのである、自ら奴隷の苦を嘗めずして、かくばかり深い辛い響を奏で出づる詩人が同情の大なるよ。

吾人は最後に別離(The Farewell)と云ふ詩を紹介したい、之は南部の方へ賣られてしまふ娘等(奴隷)に對する其母の別離の言葉である、一讀して涙の下る詩である。

さびしい、しめつぽい、沼池の田へ賣られて往つてしまつた、彼處では鞭が絶えず振られる、うるさい虫が刺す、落つる露の中には熱病の毒がある、有毒な日光が、暑い霧多い空氣を通して輝く。

——あゝ、さむしい、濕つぽい沼池の田の方へ、ヴーヂニアの山

河をはなれて、賣られて往つた、あゝ私は辛い、本當につらい、
ア、我盗み去られた娘！

と云ふ風な書き出しで、之に類したやうなことが澤山書いてある、一字一句涙である、或は「鞭が背を破つて滾々と碧血を出しても、彼等をなぐさむる母の愛はない、彼等をいたはる母の腕はない」と慨き、或は「一日の勞働に勞れはてゝ、其住家に歸つて來たとき、之に挨拶する兄弟はない、之を歡び迎へる父はない」と悲み、

あゝ去りぬ去りぬ——賣られて去りぬ、
濕氣充つ、寂しき沼池の田に去りぬ、
一日を辛勞につかれ果てゝ、
夜には汚欲の犧牲となる、
あゝ彼等は早く死すべかりしよ、

さらば壓虐者の力の達せぬ所、
鎖の音のせぬ所に、
相並んで靜かに眠り居らんものを。
あゝ去りぬ、去りぬ——賣られて去りぬ、
ヴージニアの山河を離れて、
濕氣充つ、さびしき沼地の田に去りぬ、
あゝ辛し、我盗まれし娘等よ！

と云ふに至つて、吾人は約百記のヨブの慨きを聽くが如き感を起し、其哀々たる痛切の聲は我腸の底に達するを覺ゆ。

勞働の詩

平民詩人なる彼に勞働の詩のあるのは當然である、彼は勞働に關す

る詩を澤山集めて、之を勞働の歌(Songs of Labor)と題して一纒めにしてある、彼有名な今日(To-day)と題する詩を作り、又「先づ手近の職分をするがよい、そうすれば次の職分はすぐ明かになる」と云つた英のカーライルと等しく、彼は勞働を最も重んずる一人であつた、種々の意味に於て、人間としての存在に缺くべからざるは勞働である、これを讃美しない詩人は眞正の詩人とは云はれない。

漁人(The Fishermen)と題する詩は、船に乘つて漁獲に出でんとする漁人に與うる歌で、まことに勇壯な曲である。

闇中にても晝のごとく、
海にても陸とひとしく、
上帝の眼は我等を視まもり、
其聖手は我等を支ふ、

家にあるも、甲板にあるも、
死は早晩我等を迎ふ、
險を冒して運を拓き行くときの死こそ
最善の死と云ふべけれ。

フラー、フラー、西風は、
昇る帆をみたしつゝ、
瓢々として入江に吹き下る。
漕げよ、若者、いざ漕げよ、
雜草のごとく地に縋れる
臆病なる陸上の人を離れよ。
蒼穹の群星は我等を導き

天來の風は我等を送る。

と歌つて居る、之をキングスレイの有名な**三人の漁夫**(Three Fishermen)の悲觀的なるに比べて、大なる相違がある、キングスレイは、屍となつて濱にうちあげられし夫を觀たる三人の妻女の悲を舒べて、For the men must work, and the women must weep. (男は働かざるべからず、女は泣かざるべからず)と云ふて居る、ホヰッチヤは海上の死を以て陸上の死に勝ると述べて居る、吾人はキングスレイを責めんとはしない、唯ホヰッチヤの勇き賦を貴ぶのみである。

其他彼は**造船工**(The Ship-builders)、**靴工**(The Shoe-makers)、**羊商人**(The Drovers)、**穀物の殼を去る職工**(The Huskers)、**材木者**(The Lumbermen)等について、歌つて居る、何れも彼等の正直なる勞働を讃美し奬勵する詩であつて、彼等の薄運を悲むと云ふ調子を帶びたものはない、

「材木者」の中には

勞働の斧の上に、
日光をして嬉々として躍らしめよ。

とか、又は

自由は勞働と手に手を取つて
確乎として勇敢に歩む。

など云ふ愉快な語がある。

所謂勞働問題について、彼は問題(The Problem)と云ふ詩を作つて居るが、詩人は社會主義的の思想を絶對に排して、「基督の金言の外に何等の解決なし」と斷言して居るが、思ふに此處で金言と云ふたのは、「愛」を指したものではあるまいか、個人の心靈を基礎とする社會改良を彼は願つたのであらう。

叙事詩

彼は又色々の物語を書いて居るが、何れも可憐なものである、中には土人が白人に逐はれた昔の噺などもある、奴隷に關するものもある、The Bridal of Pennacook とか Magg Megone とか云ふのは有名である、

モオド・ミュラ (Maud Muller) と云ふのも名高い、ミュラは貧家の娘であるが、或判事へ嫁しそうにした、所が思ふやうにゆかずして、此判事は高位の人の娘を貰つて滿足せず、ミュラも亦農夫の妻となつて、澤山の子にとりまかれて齷齪として働く身となつた、二人とも「あゝなれば宜かつたものを」と悲むと云ふ筋であるが、其終りに詩人はかう云うて居る。

舌とペンを以て表はす凡の悲い語の中で、最も悲しいのは「あゝなれば宜かつたものを」と云ふのである。

さもあらばあれ、吾々凡てのために若干の樂しい希望が人の眼から隱れて深く埋まつて居る、そして後に、天使が墓から其石をとり去るであらう。

と(馬太傳二十八章二節參照)、意味の深い語で、我々を靜かに考へさせる、即ち此世に於て完全の滿足は誰にも得られぬ、人世に不足は免れぬ、しかし樂しい希望が何處か知らぬが前に在るといふ意味である。

かう云ふ風に、人の世にありふれたやうな物語で、別に珍らしくはない、普通の話を普通の言葉で語るのではあるが、彼の物語の歌には何となく捨てがたい趣きがある、どことなく人の心に徹する或物がある。

宗教詩

ホ井ッチヤを知るには是非とも其信仰に關する詩を見なくてはならぬ、彼は之を最も貴んで、自分の以前の作などは誠につまらぬ物で寧ろ無い方が宜いなどゝ云つて居る(宗教上の詩は多く後年に作つた)、次に彼の宗教觀の大要を記さう。

(一)彼は教會に屬せざる獨立信仰の信者であつた、信仰といふものは潑溂たるものであつて、教會や制度などに束縛せらるべきものでないと彼は信じた、それゆゑ彼の詩には教會や教義を眼中に置かぬと云ふ氣慨が處々にあらはれて居る、我等の主(Our Master)の中に次のやうな句がある。

我等の友、兄弟、且主なる神よ、

爾に對する勤行とは何か、
名にあらず、形式にあらず、儀式の語にあらず、
唯爾に順ふことなり。

我等はものすごき犧牲をさゝげず、
我等は彫める石を積まず。
爾と同胞とを最も愛むものこそ
最も善く爾に仕うるものなれ。

爾の祈禱會とは
愛と感謝の善業を云ふ、
爾の晩餐式とは

善を爲すの喜びを指す。

あゝ彼は獨立信仰の詩人である、吾々の同志である、吾々の先驅者(プオアランナー)である。

(二)教會を好まざる彼は處々に宗教家を手痛く攻擊して居る、鋭く罵つて居る、胸が清々するほど罵つて居る、世と移り人に阿ねる所謂教職輩の面皮を引きさいて居る、實に痛快の極である、讀んで快哉を叫ばざるを得ない、人と爭はぬばかりが紳士(ゼントルマン)ではない、吾等も時には

ホ井ッチャの態度に傚ふ必要がある、勿論吾等は愛敵の精神を失つてはならぬが、同時に預言者の精神をあくまで保たねばならぬ、近時の所謂クリスチャンのごとき、俗人だか信者だかわからぬやうなものは、まさに我詩人の一喝に會ふ値がある。

教職の壓制者(Clerical Oppressors)と云ふ詩がある、**或奴隷存置派の集會**

に於て、各宗の教職が集つて、一致して其決議に賛成し、其集會に大に氣勢を添へたと云ふ報知を聞いて、詩人が義憤の餘、作つたのが此詩である、或は、

おゝ神よ、何時まで、
かゝる僧侶が眞理を賣らんとはするぞ、
爾の名に於て、盗掠のため惡事のために
爾の祭壇に於て祈らんとはするぞ。

と罵り、或は、

おゝ、惡この世を去りて、
自由と愛と眞理と正義との
天なる其住家に於けるとひとしく
全地に知れ渡らん時の

速に來らんことを。

と叫んで居る。

安息日の出來事 (A Sabbath Scene) と云ふ詩も著しい詩である、安息日に一人の女の奴隷が「愛憐深き基督の住家」と思つて或會堂に保護を乞ふ、すると僧侶が「此家と此日とを敢て穢すものは誰ぞ、見れば我家の奴隷にはあらずや」と云つて頻りに其奴隷を鞭つ、叫喚の聲はものすごく聞える、之を目擊してゐたホヰッチャは怒つて叫ぶ。

我頭は火と燃えぬ、吾は叫びぬ、
「これ、凡ての祈禱と說敎との結果なるか、
敎壇を破れ、僧侶を逐へ、
かくて吾等に大自然の敎を與へよ。
惡を以て善に代へ

主より聖書を盜み去りて
惡魔に渡す鼠賊の上に、
羞辱と輕侮と降りかゝれ」。

詩句 (Lines) と云ふ詩にも

Unmask the priestly thieves, and tear
The Bible from the grasp of hell!
敎職を帶ぶる盜賊の面皮を剝ぎ、
聖書を地獄の奪持より取り戻せ。

など云ふ非常な語がある、僧侶を盜賊と呼び地獄と見做して居る、實に壯なる勢である。

前に掲げた「信者なる奴隷」の中の、

全能の神よ、

僧侶てふ鼠賊のいつまで爾の祭壇に立つにや、
彼が祈る時、爾にあぐる手は血に汚れ、
傲れる額は惡を以て充つ。

と云ふのも、僧侶攻擊の强い語である。

(三)萬人救濟の希望も彼が信仰の一である、神の慈愛(Divine Compassion)
と云ふ詩は之をあらはす、其中の一節を引いて見ると、

罪の存し、魂の暗黑に住む中は
天國は眞の天國と云はるべきか、
冷然として地獄世界を見下し得べきか。

(四)彼は「神と共に歩む」と云ふことを重んじた、之を信仰の根柢とした、
我等の主(Our Master)の中に曰く、

To turn aside from Thee is hell,

To walk with Thee is heaven!

爾(神)より離るゝは地獄なり、
爾と共に歩むは天國なり。

と、古聖の金言を聞くの感がある。

(五)人生問題(Questions of Life)は有名な詩である、此詩はあらゆる哲理、推論、神學の無効を喝破し、斯るものを捨てゝ The still witness of heart (心の靜なる證明)にたち歸へれと云つて居る、心の中に罪惡を感じ心の中に愛を探れと云うて居る。「我等の主」の中にも

His witness is within

彼(神)の存在の證據は心の中にあり。

とある、之が彼の眞理探究法である。

(六)彼は我衷に神を認めた、湖畔(The Lake-side)

と云ふ恰もウォルヅヲスの一篇を讀むやうな何とも云へぬ美しい詩があるが、其終に曰く、

謝す、神よ、われもまた、
輝く丘に、暗き林地に、
又日没の美しき海に、
爾のやさしき愛を認む。

げに、汝は戯れに、光と美とを
此地に充たすにあらじ、
爾は爾の慈顔(自然を指す)の陰に
暗き酷き意を隱すにあらず。

神の愛を自然の裡にみとむる趣は遺憾なく此數行にあらはれて居る。

(七)彼は信者の爲すべきことゝしては最も愛、善行を重んじた、基督

信徒の天職(The Call of the Christian)と題する詩の最後に

Thy Father's call of love!

汝が父(天父)の愛の命

と云ふ句がある、前に(一)の下にあげた「我等の主」の中の數節にも、儀式を輕んずると同時に愛と善行とを重んずるの意味が充分にあらはれて居る。

爾の祈禱會とは
愛と感謝の善業を云ふ

云々と云ふのは千古不拔の鐵案と云ふべきである。

禮拜(Worship)と云ふ詩は眞正の禮拜とは愛の行であると云ふ意を强い言葉であらはした詩である、先づ儀式などの無効を述べて、さて曰く、

おゝ兄弟よ、爾の兄弟を爾の心情に抱け、
憐愍のある所に神の與ふる平和あり、
正しき禮拜とは兄弟を愛することなり、
微笑は讃歌なり、善事は祈禱なり。

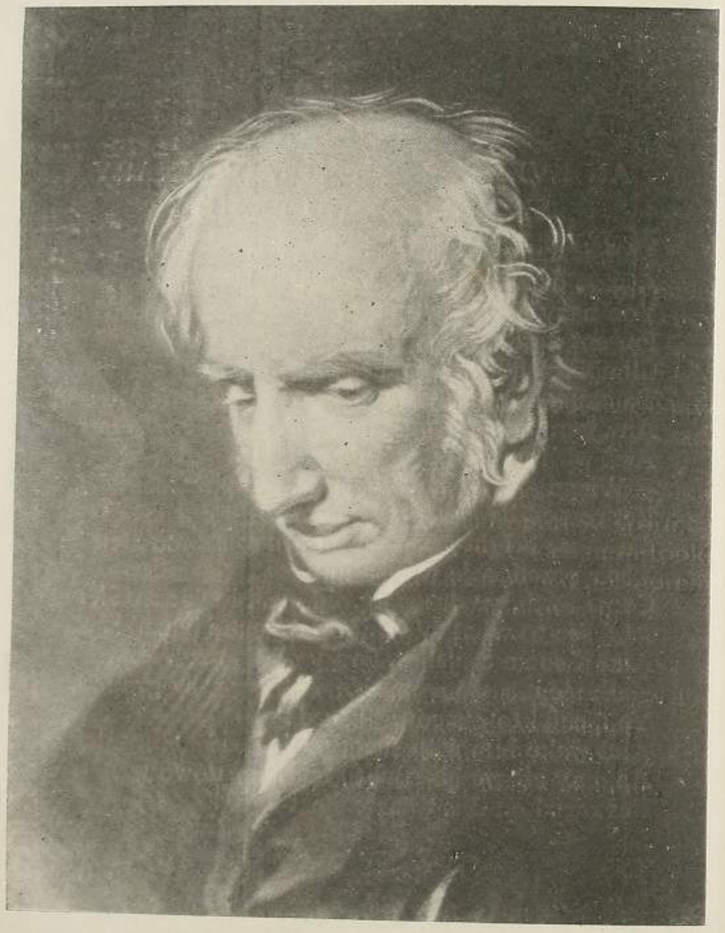
基督の神聖なる仕事は「善をなすこと」なりき、
彼の偉大なる模範に從ひて歩め、
かくせば、地は天父の神殿と見え
他を愛するの生活は感謝の詩たらん。
かくて、凡ての枷はとれん、
戰の雄叫びは地に跡をたゝん、
愛をして怒の火を踏み消して

其燒跡に「平和の樹」を植ゑしめよ。
愛を以て地を征服するとは此事である、これ凡ての難問題を解決する唯一の鍵である、これ大世界を蔽ふ大なる精神である。

＊　＊　＊　＊

ジョン・グリーンリフ・ホイットマンは右の如き詩人であつた、彼の遺骸はいまや、冷かに地中に横つて居る、しかし彼の、ために熱心奮闘した奴隷廢止は其生前既に行はれ、彼の絶叫した自由主義の信仰は、いまや次第に世界に擴まらんとして居る、舊い形式を廢し束縛を脱して、風の如く森の如く自由である潑剌たる信仰は、いまや新時代と共に廣がつた、第二の宗教改革は起りつゝある、少くとも其先驅者の一人と云ふべき我ホイットマンの思想を味ふのはあながち無益でもあるまいと思ふ。

ウォルヅヲス



千七百七十年四月英國にて生れ
千八百五十年四月英國にて逝く

預言者は詩人であり、詩人は預言者である、二者の間の區別を立てることは甚だ難い……預言者も詩人も均しく直に神より遣られたる者であつて、人より に非ず又人に由らず、直に神に由て立てられたる者である、若し强ひて兩者の間に區別を立てんとするならば、余輩は預言者は昔の詩人、詩人は今の預言者と謂ふのが最も適切であると思ふ、二者は同階級上の人である、儀禮に重きを置く儀式家、文字を爭ふ神學者の正反對に立つ者であつて、活きたる神に最も近く立つものである。（内村鑑三著『研究十年』より）

ウヰルヅヲスが晩年の詩

千八百五十年四月廿三日、湖畔詩人井ルヤム・ウヰルヅヲス（William Wordsworth）は齢八十にして、英國カムバーランド州ライダル山の閑居に逝けり、其前二十年間彼は詩界の大聖なりき、世は彼の生涯の大部を通じて彼に冷かなりしと雖も、幸か不幸か彼の長壽は彼をして己れの名聲を聞かしめたり、千八百三十七年伊太利漫遊を了へて歸るや、彼の名聲はます〳〵高く、オックスフォードは博士號を以て彼を飾り、政府は年金を以て彼に報い、求めざるに欽定詩宗の榮譽は彼を見舞へり、されど彼は依然としてライダル山の農夫なりき、而して晩年に臨みて彼の詩はます〳〵脫俗超世の趣を生じ、天然と天國とは彼の詩腸を占領せり、大詩人が晩年の作を閲して我等は西

AN EVENING OF EXTRAORDINARY SPLENDOR AND BEAUTY

And, if there be whom broken ties
Afflict, or injuries assail,
Yon hazy ridges to their eyes
Present a glorious scale,
Climbing suffused with sunny air,
To stop—no record hath told where!
And tempting Fancy to ascend,
And with immortal Spirits blend!
—Wings at my shoulders seem to play;
But rooted here I stand and gaze
On those bright steps that heavenward raise
Their practicable way.
Come forth, ye drooping old men, look abroad,
And see to what fair countries ye are bound!
And if some traveller, weary of his road,
Hath slept since noon-tide on the grassy ground,
Ye Genii! to his covert speed;
And wake him with such gentle heed
As may attune his soul to meet the dower
Bestowed on this transcendent hour!

天落日の光輝を聯想せざる能はざるなり。

勞働者の晝の讃歌（Laborer's Noon-day Hymn）

朝、讃美の聲は
神の聖座にのぼり、
夕影うすき時
讃歌は神にいたる。

眞晝に聖き歌を捧ぐるも
彼の聞き給はぬことはあらじ、
されば我等此處に憩ひて
いざ感謝讃美の歌を唱はん。

われ等の荷物は輕からねども
朝より夕まで絶間なく働くを要せず、
正午時の休息こそ
我等の感謝して受くる所。

此一時間の休息の中、
我等の神を讃美せんと
勇みて用ふる數分時こそ
こよなく有難き時間なれ。

此時、田畑は聖き場所なり、

各人の小屋は祭壇なり、
森は會堂にして
生ける枝葉は其屋根をなす。

天を看よ！　勤勉なる日輪は
既に行程の半ばを走れり、
彼は止らず又外れず、
されど我等の靈は然らじ。

主よ！　日東天に出でし後
われ等もし道に背きしならば、
爾の豐かなる愛を以て

殘る半日を導き給へ。

爾の慈悲を以て、此短き生の間
我等の行路に我等を支へ、
我等が最後の休息に入るの時
西にて我等を祝し給へ。

註。ウォルヅヲスは此詩の前に記しぬ、曰く「朝と夕の讃美歌は多けれど、晝間のそれは世に稀なり、田園空氣清き處、父母は野にありて半日の勞働を終へ、子等は晝飯を籃に入れて父母の許に運び、共に質素なる食を取らんとす、その時此讃美歌の彼等に由て歌はれんには余の喜びいか許りぞ」と、まことに良き農夫の讃美歌なり。彼は敎ふ、神は天然の神にして又勞働の神なれば、天然に包まれ勞

働の中にて拜すべきなり、田園はこれ聖殿、茅屋はこれ祭壇、森林はこれ會堂なり、我等大自然の愛に包まるゝもの、隨處に神を拜するを得、敢て人の手の造れる堂宇を要せず、而して土を起こし田を耕す間に於てこそ、眞の感謝を以て神を拜するを得べきなれと、キリストの所謂靈と眞の禮拜(約翰傳四の二四)とは寔に此詩に曰ふが如き禮拜を指すなるべし。

汝の誇りは大なりき (Proud were ye, Mountains, when, in Times of Old.)

あゝ山よ、古昔、愛國の民が
汝の面に塹濠を穿ちて
敵人の侵入を防ぎし時、汝の誇りは大なりき。

さるに、今や兇星のごとく
ブリテン國に暴威を振ふ
貪婪の魔鬼は、汝を辱かしめ
汝の平和と美とを奪ひ、
汝の包める黄金鄉を貫きて
驕れる汽車に道を拓かんとす。
聞かずや汽笛を? 長蛇前に進む時
山よ汝は之を看しか、
然り、汝は驚ろけり。
利と害とを較べ量りて、
山よ谷よ河よ、汝等
正しき嫌惡の情に燃えよ。

註。千八百四十四年鐵道はエストモアランド州ケンダルより延びて、彼が閑居に近きサンダミヤ湖に來らんとす、彼此企畫を聞き七十四歳の老齢を以て慨然として起ちて其非を鳴らす、此詩は其時の消息を洩すもの、瀕死の老翁に此意氣あり、我等耻づべきに非ずや。

彼の意や一に文明の嫌忌にあり、二に天然の神聖にあり、三に惡風の侵入を憂ひしにあり、曰ふ、萬人の偶像たる文明は唯貪婪の魔鬼たるのみ、神聖なる天然はそれがため汚さるべからず、山は敵兵の入冠を防ぎ又文明の侵入を拒むもの、即ち政治と思想の獨立を供す、之を開いて鐵道を通ずるは惡魔の通路を造るものなりと、詩人の言を固陋と定むる勿れ、「利と害とを較べ量りて」後、我等初て斷定を下し得るなり、今や我國の山河と社會とは文明の侵入に會ひて荒寥甚だし、詩人の言、豈我等に關係なしとせんや。

宵の明星に與ふ (To the Planet Venus)

(千八百三十八年一月、金星地球に近づきければ)

夜毎に人界に近づきて
ます〳〵親愛をもて輝く夕の星よ、
如何の強き誘引が汝を惹き、
如何の靈が汝を導くぞ。
まことや天然は其寶庫をひらき、
曾て自然の莊嚴に慄へし人類も
今や揚々として之を制し、
科學は步武堂々として進む。
されど我等は愛と柔和を增したるか、

純美と賢良とは古昔にまさるか、
汝が見る處を語れ、明星よ、
之等こそ、吾等眼を閉づる前、
吾等この世を去る前に、
心情をして天と交らしめ、
靈魂をして未來の榮光に
適せしむるものに非ずや。

註。大なるは文明の進歩なるかな、科學と工藝と相伴ひ相進みて、人類は今や天然を征服したりと誇稱す、しかも我等は愛に於て信に於て心情に於て誠實に於て幾何の進歩をか爲したる、進歩の見るべきは無くして退歩の明かなるあるに非ずや、寔にラスキンの文明人とは信ずることの外は何事をも爲す民なり

と云ひしが如し、人類の低落も甚しと云ふべし。地を得たる人類は天を失へり、天と交り來世を望むの希願は今や人の中に無し、かくては五十年地上生涯の利福も何するものぞ、これキリストの

汝等神とマモン(財の神)に兼ね仕ふること能はず

てふ絶對の眞理を受けざるがため、悲むべくして當然なる結果なり、明星の夜毎の光は人に此事を敎へんがためか。

五月の朝 (Composed on a May Morning)

かなたの羔は、今日と等しく、生れて間もなし、
されど天然は彼等の大なる指導者なり、
長じては季節の變を歡び迎へ、

陰欝を避くること恰も今
母親の傍に日光の中に安居して
黎明の薄光を忌むが如けむ、
又は伴ふ我影の變化とともに
彼方此方に走るならん。
露まだ消えぬ芝地を避けて
彼等は草の醒め花の開く
輝々たる綠の野に向ふ。
――われ等何とて神に賴らざるか、
恩惠と希望との中にありて
潑溂たる歡喜を終焉まで持ち得ざるか。
獸は生れて身を天然の懷に托し泰然として靜かに住む、神はこ

註。

れに日光と空氣と食物と水とを與へ自らにして彼等は育つ、彼等は季節の變化に驚かず、陰欝と懷疑に陷ることなく、踴躍して山に登り谷を走る、「萬物は神に在りて悉く可なり」（ブラウニング）。

山は河と和し、野は風と應じ、森は泉を伴ひ、湖は鳥を映す、萬物皆調和の樂を奏するに人のみは懷疑陰暗に充ちて信賴と平安を失へり、されば我等天然物の日々に倣ひて歡喜の生を送らざるべけんや、

キリスト曰はずや。

神は今日野にありて明日爐に投げ入れらるゝ草をもかく裝はせ給へばまして汝等をや、あゝ信仰うすき者よ

鴉を思ひ見よ稼かず穡らず倉をも納屋をも持たず、然れど神はなほ彼等を養ふ、まして汝等は鳥よりも貴きこと幾何ぞや

と、我等宜しく目下の恩惠と後の希望とを併せ感じて「潑溂たる歡喜

を終焉まで」持續すべきなり。

我等何故泣くぞ傷むぞ (Why should we weep or mourn, Angelic Boy)

かの兒世を逝る前は天使の如かりき、
聖くして常に事に勵み、
盡きざる喜悅と
此世にゆるさるゝ最大の希望もて
日毎に愛せられたりき、
我等なに故泣くぞ、傷むぞ。
死は當に
其威力と其に其慈悲を現はせり、

死のみが肉體を除き得るなり。
遙けき彼方ローマの野に
肉體は朽つべく横はる、
されど惠まるゝ兒よ、
天は今汝が靈の住所なり、
汝、神聖なる交通に入るを得ば
汝がローマの墓は
汝の好き記念物たらん。

註。われ等の最大なる目的は「天國」にあり、「永生」にあり、而して「神聖なる交通」に入る處即ち天國あり、永生あり、此世に於ても之あり、されど彼世に於ては尙確實ならん、「われ等今鏡をもて見る如く見る處昏然なり、されど彼の時には面を對せて相見ん」(哥林多前書十三

の十二)、而して之がために地位、名譽、財産、肉體等地上の物を失ふも亦已むを得ざるなり、キリストは曰へり。

窄き門より入れよ……命に至る路は窄くその門は小さし(馬太傳七の十三、十四)

その生命を保全うせんと欲る者は之を喪ひ我がために生命を喪ふ者は之を保全うすべし、人もし全世界を利するとも自己を喪ひ自ら亡びなば何の益あらんや(路加傳九の二四、二五)

と、パウロも云へり。

われ主キリストイエスを識るを以て最も益される事とするが故に……之等の凡てを損せしかど之を糞土の如く意へり(腓立比書三の八)

と、此意味に於ては肉體の死も亦「其慈悲」を有すと云ふべし、死や「恐怖の王」として最も人の恐るゝ處なりと雖も、「死のみが肉體を除き得て「神聖なる交通に入」らしむるとせば、死も亦其恩惠的半面を有するなり。

眞理は何處に在る乎 (Where lies the Truth?)

眞理は何處に在るか?
人間はまことに憐れなる運命を持つか、
休息は短くして、益々
勞苦悲愁は增すにあらずや。
彼れ背恩者にして
神恩を輕んじ忘るゝか。
花は躍り、

雲雀は急ぎ巣を出でゝ
旭日に歡聲をあぐるなるに、
人のみは勞苦に生れ悲哀に住むべきか？
天地に聞ゆる歌を唱ひて
彼等は揚々として高處に昇るなり。
――されど空しく歎く勿れ、
彼等上昇者の如くわれ等も昇らん、
我等は人生の悲痛艱苦を經て
より輝きより清き天を目指す。

註。
人生艱苦多し、時に思ふ、人はこれ呪はれし生物に非ざるかと、又時に思ふ、斯る懷疑は神恩を忘れしがために起りしなるかと、あ「眞理は何處にあるか？」と、疑團一度深くとぢこめては速かに晴べくもあらず、懊惱堪へ難し。然れども「花は躍り」雲雀は蒼空を目指して飛ぶ、我等も亦之に傚ひて昇るべきなり、人には罪あり、然りと雖も亦靈あり、罪は我等を世に縛らんとする肉情の生む處なれど、靈は自由を渴望して高く天に翱翔せんとす、罪をして罪たらしめよ、艱苦をして艱苦たらしめよ、要はこれに終始せず、これに膠着せず、靈をして天の彼方「白き大なる寶座」（默示錄二十の十一）に向はしむるにあり。

一老人 (I know an aged Man constrained to dwell)

養老院に住む身となりし
一老人をわれは知れり、
獄屋にある罪人のごとく

近くに人は多けれど伴侶はなし。

かれ乏しくて施物に頼る身なりしも、
小舍より蹌踉き出でし時は、
一羽の駒鳥に食を頒てり、
駒鳥は小道にて之を食へり。
（小舍へは來得ざりしなり）

廢殘の勞働者は
樹の根に腰うちかけ、
膝の上や地に散らせしパン切を
駒鳥は一つ又一つ啄めり。

日に彼等の交誼は密なりき、
逢ひし時の歡喜の表顯よ！
思へ、共通の平和、無邪氣の嬉戯、
別るゝ瞬間、後の哀傷！

一は翼をはゞたゝき嘴を動かし
一はふるへる手もて愛撫し、
季節は變れども變らざる愛に
日は過ぎ月は逝けり。

かくて此恰好の場所に於て

堅き愛着は孤獨者の間に生じぬ、
されば後、老人、衆と共に住みし時
人との對話を避けたりき。

妻、子、親戚は皆さきに逝きぬ、
されどもし不運が彼を妨げずば、
一の生ける支柱は殘されて(譯者註、支柱とは駒鳥を指す)
失ひし總量を償ひしなりき。

おゝかの善良なる老人が
不可思議の報知に導かれて
「彼は尙ほ鳥を愛するなり、愛すべきなり、

共在は破るゝも友交は續くなり」と悟らんことを願ふ。

註。我等は愛さずしては生くる能はず、愛されずしては生くる能はず、愛は靈的生命の保存のために必要なり、其發育のために必要なり、

パウロ曰く、

汝等目を醒し、堅く信仰に立ちて、丈夫の如く剛かれ、汝等の行ふ處皆愛を以て行ふべし(哥林多前書十六の十三、十四)。

と、覺醒は必要なり、信仰確立は必要なり、丈夫的行動亦缺くべからず、而して愛的行爲は常に行はれざるべからざる處、我の愛を受くる人なくば、我は禽獸蟲魚に愛を注ぐべく、愛物との共在破るゝも尙愛を注ぐべきなり、而して全き孤獨に陷るも、我を愛し我の愛する「人以上の人」あるを忘るべからざるなり、

パウロ又曰く、

キリストは我等のなほ罪人たる時われらのために死に給へり、神

は之によりて其の愛を彰し給ふ(羅馬書五の八)。

と、此の所信、孤獨の中に我等を救はん。

夜の女王 (How beautiful the Queen of Night)

天上雲を衝いてすゝむ
夜の女王〔月〕の美しさよ、
折々暗雲のかげに
かくれて姿を沒す。
されど瞻よ、心して瞻よ、
雲の緣の光輝こそ
やがて月の雲を破りて
再び晴空を歩む前兆ならずや。

註。月が雲に入りしとて月なしと想ふ勿れ、雲端の光輝こそ再出現の豫兆ならずや、仰げよ明光は天に在り、顧みよ光明は汝が生涯にあり、一時の陰雲を以て天空の全般を定むる勿れ、一時の患難を以て生涯の全部と見る勿れ、暗夜も曙紅の驅逐する所となるべく、嚴冬も陽春の前に失せん、パウロは曰へり、

神は信なる者なり、汝等を耐忍ぶ能はざる誘惑に遇はせじ(哥林多前書十の十三)。

と、ヤコブは曰へり、

もし汝等樣々の試誘に遇はゞ之を喜ぶべきことゝすべし(雅各書一の二)。

と我等月の出沒によりて此秘義を學ぶべきなり、暗黑も亦光明の反證とならん。

夜の流れ（The unremitting Voice of nightly Streams）

夜の流れの絶間なき音が
草間にかゞやく虫
樹蔭に默する鳥
死せる葉、眠れる花に快感を與へずば、
其潺々の美曲は空に歸するかと思はる。
されど然らざるなり、
（外觀は眞相にあらず
天には浪費なし）
此虛妄なき調和の曲は、
人々の胸に入りて睡眠と交はり

たのしき夢を結ばしむる
慰安力を有するなり。
これ太古萬民の
いさゝ小川の岸に感せし處、
今日もなほ
急流洶湧の畔に住む野人
漣波の奏曲を聞く農夫は、
感謝に充ちてこれを認む。

註。「天には浪費なし」、一葉の落つる、一莖の枯るゝ、全く無意味にはあらざるなり、キリスト曰く、
二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに汝等の父の許なくば其一羽も地に落つることあらじ（馬太傳十の廿九）

と、夜の流れの潺緩たる音も空しく消えず、里人の眠りを安からしめ樂しき夢を結ばしむ、大なる人生の「慰安力」にあらずや。

書物！そは終なき勞苦のみ、
來つて森の紅雀を聞け、
其奏樂の美しさよ！まことに
書物より多くの智慧此にあり。

聞けよ！鶫の歌の晴れやかさ！
彼も亦貴き訓教者なり、
出で來つて萬物の光輝を見よ、
天然をして汝の師たらしめよ。

彌生の森の一瞥こそ
人に就き善と惡とにつきて

汝に敎ふること
聖者の敎の凡てに勝らん。

然り、天然に浪費なし、而して我等の勤勞にも亦浪費なし、神愛の下に勞働して一言一動の空に歸するはあらざるなり。
造れよ、造れよ、物の最小片なりとも造れよ、神の名に於て造れよ、汝の有する處小なるも、全部をあげて出でよ、起て、起て、手の爲さんとする處は何事なりとも全力を以て爲せ、今日と呼ばる丶中に働け、夜來らば誰人も働き得ざるなり（カーライル）。
働けよ働けよ、而して凡ての結果を神に托せよ。

激流の畔に立ちて　(On the Banks of a rocky Stream)

激流巖をうち且躍り且吼ゆ、

見よ、人の心に似たり、
百想湧けど動きて定まらず、
恰も此渦流の泡のごとく、
互に逐ひつ逐はれつ
めぐり又めぐれど
出口なく安止所なし。
――旅人よ、汝かゝる不安を抱かば
跪きて大能の助けを求めよ。

註。あゝ我等の心は渦の如く其想念は泡のごとく轉々動けども、同一の場所に動くのみ、此中より脱却する能はず、此中にて安息する能はず、まことに哀れなる捕囚の身なり、不安と妄動……實に醜きは我心かな、唯大能の御手のみ能くこれを救ひ給ふ、――キリスト我等

を慰めて曰ふ、
凡て勞れたる者また重きを負へる者は我に來れ、我れ汝等を息ません……なんぢら心に平安を得べし(馬太傳十一の廿八、廿九)
と、我等「暗中に泣く赤兒」(テニソン)、唯母の援助を祈るの外無し。

光明耀々くの夕 (An Evening of extraordinary Splendor and Beauty)

一

あゝ光明耀々くの夕かな、
もし此光輝舞ふがごとくに
消え失せしならば、
われは無聲の雲間に

驚愕の眼を放ちしならん。
されどそは却々に消えずして、
暮るゝ夕を聖化すなり、
かくて脆き人の子も
彼世の面影を偲び得ん。
往昔は天使の一隊
森に夕の讃歌を唱へ
野をも入江をも
妙なる聲にて包み、
又は星のごとく各々高處に居して
天のため地のために
縄好の曲を奏でたりとぞ聞く。

—今かゝる天人の美曲の
山より響き來るとても、
此靜謐、此輝光、
此陰影、此平和の夕に越えて
崇高き狂喜、潔き愛を與へじ。

二

聞として音なし、
たゞ深く貴き調和の
空谷に充ち
林地をつらぬく。
輝々たる光明に浴しては
不思議の力にひかれて

遠き野の山も近く見ゆ、
光輝は物に觸れて寶玉の光を與ふ。
世にも鮮かなる光明の中に
鹿は山側に並び立ちて
其角はきら〳〵とひらめき、
羊群も亦かゞやきて見ゆ。
紫紅の夕よ、汝が時の靜けきよ！
されど神聖なる希望の
我靈魂にさゝやきて已まぬ間は
此莊美を汝の所有物のみとは我は信ぜず。
—まことや此世ならぬ世界より
此恩賜の一部は來れるなり、

我牧羊者の踏む土地に
天よりの光明の來り交れるなり。

三

悲痛に泣く人よ、
患難に苦む友よ、
かなたの峯こそは
まこと「ヤコブの梯」とは見えずや、
輝く大氣に包まれて天に登る彼の梯は
止まる處なく、
想像の翼を張つて登らしめ
不朽の靈と交らしむ、
—我肩上の翼ははた〳〵と鳴る、

されど我は此處に止まり、立ちて
天に登る眞の道たる
彼の輝々たる階段を凝視す。
出で來れ汝首うなだるゝ老人よ、
目をあげて看よ、
汝の往くべき國の如何に美しきぞ！
又もし行路に勞れはてゝ亭後
芝地に眠れる旅人あらば、
汝精靈よ、彼が許に急ぎゆきて
いと〳〵静かにゆり起し
此光明の夕の恩賜を受け得んやう
彼が靈を開發よ。

四

あゝ樂しかりし幼兒の時
我眼は何れに向ふとも、
天よりのかゝる光明は
常に眼前にたゞよひたりき。
此榮光の閃華、いかにして今再び看しぞ？
問はじ〳〵、たゞ感謝せん、
長じて後は此靈光の痕跡の
唯夢にて看られしなるを、
今面の當り看ることの有難さよ。
天然の威嚇と共に
平和静寂を伴ふ大能力よ！

われもし惡に染まり
われもし爾を離れんとする時は、
爾われをして此光明を思ひ起さしめよ、
此光明夙に我を去りて唯悲しかりしを
いま醒めたる眼にあらはれて
輝くぞ奇跡なる、
我靈なほ地にまみるれど
新生に狂喜すなり！

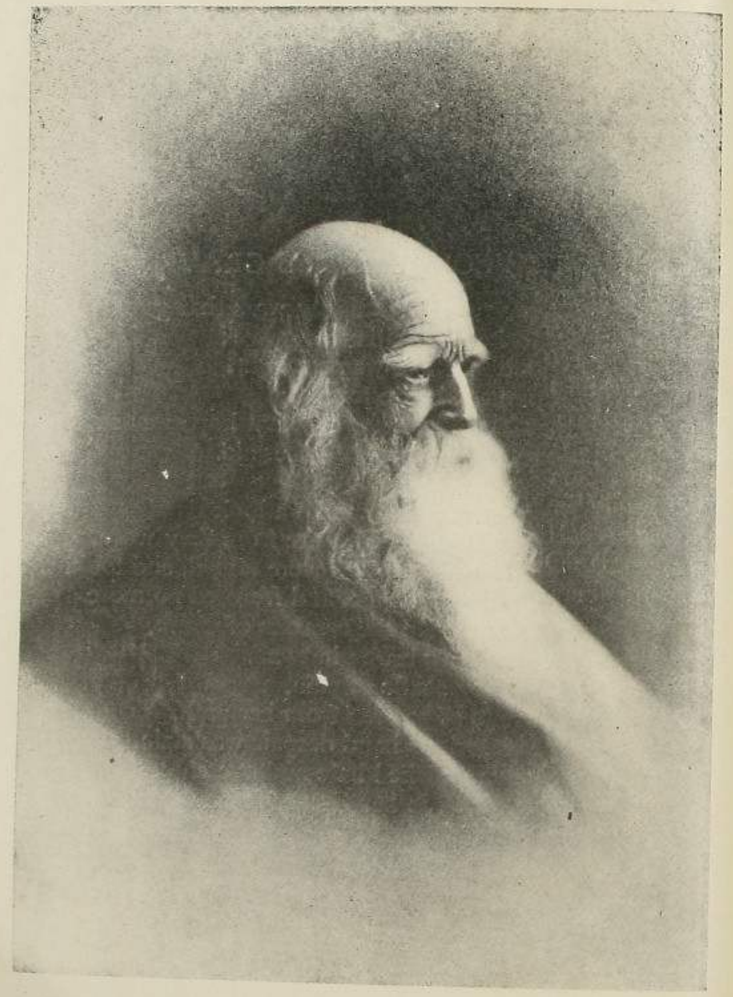
＊　＊　＊　＊　＊

去りぬ、光輝は失せぬ
夜は陰を伴ひて近よる。

註。此はウチルヅヲスが或光明の夕、天然の聖美にうたれて未來の鄕國を仰望せし詩なり、第三及び第四が此詩の中心にして、彼は幼時及び老齢は天國に近きものとの感を抱き、幼時に失ひし來世の光輝の老齢に至て再び現はれしを感謝したるなり、「ヤコブの梯」は創世記二十八章にあり、其精神を採つて此詩に載せしなり。

耀々たる夕の輝き洵に繪に見るが如く、切々たる來世の希望は莊嚴雄大を極めたり、莊美なる哉此詩！偉大なる哉此詩人！

トンアイラブ



千七百九十四年十一月米國に生れ
千八百七十八年七月米國にて逝く

詩人の二種

詩人に二種類ある、二種類に限る、第一種は創造的詩人であつて（シエークスピヤ、ホーマー、ダンテ）、第二種は反省的又は知覺的詩人である（ワチルツチス、キーツ、テニツソン）、そして彼等の持場は違ふが、彼等は各〳〵その持場に於て第一流でなくてはならぬ、凡そ詩に於ては第二流のものを以て人を煩はしてはならぬ、第一流のものが充分ある、一生の間に讀み盡し味ひ盡せぬ程澤山ある、されば第二流以下の作を以て人を煩はすのは明白に惡事である、罪である。

（ラスキン著『近世畫家』より）

カレン　ブライアント

生涯

「北米のウォルヅヲス」と呼ばるゝ、井ルヤム・カレン・ブライアント(William Cullen Bryant)は千七百九十四年十一月三日、マサチューセッツ州のカミントンに生れた。十八世紀の多事なる米國の精神的首導者なりし彼は、其共働者なるリンカン、ガリソン、ホ井ッチャ等の悉く十九世紀の初頭に生れたのに反して、獨り舊世紀の末葉に呱々の聲をあげた、米國の精神界の開拓者の多くと等しく、彼は、千六百二十年にメーフラウァ號に乘つて米國に渡航し自由の鄕を未開の森林に建てた清教徒の子孫であつた。

THE CONQUEROR'S GRAVE

Nor thus were waged the mighty wars that gave
The victory to her who fills this grave:
　　Alone her task was wrought,
　　Alone the battle fought;
Through that long strife her constant hope was stayed
On God alone, nor looked for other aid.

She met the host of Sorrow with a look
　　That altered not beneath the from they wore,
And soon the lowering brood were tamed, and took,
　　Meekly, her gentle rule, and frowned no more.
Her soft hand put aside the assaults of wrath,
　　And calmly broke in twain
　　The fiery shafts of pain,
And rent the nets of passion from her path.
　　By that victorious hand despair was slain.
With love she vanquished hate and overcome
　　Evil with good, in her Great Master's name.

父の家も母の家も強健と長命とを特色とするものであつた。父のピーター・ブライアントは醫師であつたが、少年にして人生の辛慘を嘗め獨學精勵して醫師となつた人、所謂立志傳中の人物であつた、嚴格なるカルヰン主義の家に育つた人であるが、も少し自由な信仰を持て居たらしい、又詩に對する趣味深く大抵の有名な詩人の作は其書齋を飾つたと云ふことである。母はあまり敎養はなかつたが常識の發達した人で、終日家事に勤めて厭はず、紡ぎ織り、小供の着物を造り、又小供に「讀み書き」をも敎へた、「怠惰なる勿れ」といふ語を完全に實現した人であつた。ブライアントが詩人としての詩想と操觚者としての活動とを併せ思ふ時、吾等は其の因て來る源を想ふ。

ブライアントは幼にして詩作を好み、十三歲の時何か時勢に關する詩を作つたのを、父がボストン市に持て行て印刷に附して世に發表

したことがある、此諷刺歌は大分賣行よく忽ち再版を出したといふことである。

云ふまでもなく彼は宗敎的家庭に生育したのであつて、母や祖母から「主の祈禱」其他を敎へられ、常に祈禱會などに連り、「神よ罪人なる我を憐み給へ」といふ稅吏の祈禱(路加傳十八の十三)を度々爲した、又、「不朽の詩を作るの天才を與へ給へ」と云ふ祈願を怠らなかつた。

十六歲の時、ヰルヤムズ普通大學に入つたが、僅か七ヶ月にして退いた、多くの思想界の偉人と等しく彼は學校生活をあまり好まなかつた、此學校については次のやうな意味の詩を作つて居る。

科學が眞面目顏に坐して居る此貴い圓天井の家を何と詠はうか、
あゝ其恐しさと物淋しさは唯憐れな內住者(生徒)のみ知つて居る、
講堂を靑い顏の學生が氣の脫けた顏で逼ひ廻る、まるで幽靈のや

ふだ、又は萎れて小さい室に潜り込む、此室といふのは暗く、汚く、濕つて、低く、陰暗と汚塵と蜘蛛巣の住處だ。

彼は家に歸つて獨修を始め、父の藏書を讀んで博物學や詩の知識を可成獲た、又時々詩作を爲たが、其詩にはウォルズヲス、サウゼー等の感化が認めらるゝといふことである、此頃作つた詩の中に「**ヤナトプシス又は死觀**」といふのがある、之は彼の傑作と呼ばるゝ有名な詩である、二十歳未滿の少年の作としてこれ程の名吟は恐らくは他に無いことであらう。

彼は少年の夢に襲はれて政治家の生涯を望み、先づ法律の獨修を始めた、それ故父は彼を或法律家の許へ送つて法律を學ばしめた、後此處を去つて更にブリッジヲーターに住む下院議員にして法律家なるベーリー氏の許に研究を續けた、かくて千八百十五年には試驗に

及第して辯護士の資格を與へられた、そして父の家に歸つた。

其後彼はグレートバーリントンにアイブスなる人と法律事務所を開いた、此町で彼は肺を病んだが辛うじて恢復し、熱心業に從事した、そして此頃から雜誌へ詩を寄贈することを始めた。

千八百二十一年彼は妻を娶つた、其二年前に父は世を去つた。彼は友人の勸誘に應じて舊作八篇を輯めた四十八頁の小詩集を出版した處、之は多少世の注意を牽き、英國に於ても其價値を認る人があつた、英國第一流の詩人コルリッヂの子ハートレー・コルリッヂ(論文家且詩人)は、此小詩集の中「**水鳥に與ふ**」を激賞して、英詩中の最上の短詩と云ふた、併し詩人として盛名を博するは、前途尙遼遠である、雜誌の寄稿家としても、僅少の報酬を得るに過ぎなかつた。

ブライアントは辯護士として可成りに成功したが、文に天才のある

彼は永く法律事務の中に沒頭することは出來なかつた、遂に千八百二十五年ニューヨーク市に移轉して筆の生涯を開始せんとした、天と自己の腕との外頼る處なき一青年は、抑へ難き自覺に動かされて今や天職の第一歩に入り、荊棘を伐て獨り己れの運命を開拓せんとす、其前途は明か暗か。

彼は先づ雜誌記者になつたが、其雜誌は一向に榮えず、薄給に苦しむ境遇であつて、雜誌記者としての彼は未だ成功に至らなかつた、偶々ニューヨーク・イーヴニングポストといふ新聞の臨時記者に聘せられて、新聞記者の生涯に入ることゝなつた、詩人をして安らかに詩作にのみ從はしむる程寛大ならぬ此世は、生活のために繁雜な仕事を課することを厭はぬ、我詩人も亦此世に生れては、新聞記者たるの招聘に「此の方が詩作や雜誌事業より結構である」と云つて應じな

くてはならなかつた、ミルトンの『失樂園』を僅か五磅で買つた此世は、衷に於て大なる凡ての人に對しては薄いものである、預言者を虐遇め救主を殺す此世のことゝて敢て異しむに足らぬ。

千八百二十九年齡三十六にして、彼はイーヴニングポストの主筆となり、以後約半世紀の間此位置にあつて、言論を以て時代を導いた、彼のごとき高士がかくも長き間新聞記者たりしを見れば、當時の新聞なるものは今日のそれほど低きものではなかつたのであらう、ウチシントン、リンカンを大統領に選んだ米國と、ローズヱルトを大統領に仰いだ米國との間には、大なる徑庭があるものと見ねばならぬ。

新聞記者たる間にも、時々詩作をなし詩集を出版して、詩人として第一流の名聲を馳するに至つた。

南北戰爭は終つた、彼は七十歳となつた、彼の誕生を祝ふために大會合はセンチュリー倶樂部に開かれて、米國第一流の人士が演說をなし詩を朗讀した、詩人ローエルも亦、

山々の聲も彼に順ひ
急流も彼の歌に動きぬ。

彼は見えざる者に對する信仰を歌ひぬ。
自重と名節と愛國心は彼の歌に溢る。

と歌つて、老詩人を稱揚した。

千八百六十六年妻死して、彼は孤獨を慰むるために、海外漫遊に出かけ、其間にホーマーの飜譯の續きを急ぎ完成せんと毎日四十行づつを譯し遂に六年の苦心の後、希臘詩人の不朽の名作は英詩となつて世に表はれた。

八十歳の誕辰は銀の鉢を以て祝はれた。

八十四歳に達して尙元氣は衰へぬ、彼は、五月二十九日、伊太利革命の精神的首領マヂニーの銅像除幕式に演說を依賴されて、稍々不快なのを押して出席した、演說の初には元氣に乏しかつたが、伊太利の愛國者に對する彼の衷心の畏敬は彼の熱情を煽つて、彼は思はずも熱誠をこめて演說した、式後友人に招かれて其家に至り戸口を入らんとして後に倒れ後頭部を撲つて腦振蕩を起し、これが基因となつて遂に八十四歳の高齡を以て世を終ることゝなつた、時に千八百七十八年七月十二日である、遺骸は國民全體の哀悼の中に彼の特愛の地なりしロング島のロスリンに埋葬せられた、彼は曾て願つた通り、

To the calm world of sunshine, where no grief

Makes the heart heavy and the eyelids red.

悲哀が心を壓し眼を曇らすことなき
靜寂なる輝く世界にまで、
旅立つたのである。

人物

ブライアントは活動と思索との兩面を具へた人であつた。法律家としても相當にやり、新聞記者としても最優者の一人であつた、屢々諸處に詩學に關する講演を試み、又演說家としても拙劣ではなかつた、幾度も歐洲を訪うて見學し羅馬にまで至つた、最期の年に於ても其精力は衰へず、其毎日の活動は壯年時代と少しも變らなかつた、新聞記者としては紙上に於て國民を指導することを怠らず、決鬪の惡事なること、奴隸賣買の罪惡なること、勞働者が組合を造る權利あること等は彼が大聲疾呼して世に敎へた處であつた、米國の自由を益々大にして其天職を果さしめんとするのが、彼の愛國心であり又彼の操觚者としての事業であつた。南北戰爭の起るや、既に其前より奴隸制度を排擊し居りしブライアントは、文に詩に北部のために熱誠を注いで努めた、此點に於ては彼はガリソンやホイッチヤと共に其功を分つべき人である。

かゝる人であつた故、常に主義を抱く人(principled man)で、右に就くか左に就くか判然して居つた、從て彼は天性激烈の所があつて、常は憤激を抑へて居たが、一生に唯一度抑へきれないで、一人の政敵を毆りつけたことがある、實に彼は曾て彼の歌つた通り「眞理のために戰つて、死に至て初て戰をやめた人」である。

しかし活動性の裏面に沈思性があつた、波濤の下に靜水が湛へられて居た、彼が二十二歳の時辯護士の資格を得た後、直ちに爲した事は事務所の開始ではなくて天然の研究であつた、其年の十二月にはプレーンフィールドといふ一小村に引込んで、八ケ月間天然を友として暮した、名作「水鳥に與ふ」は此村に初て到着した夜の自分の孤獨の感を鳥に寄せたものである、ニューヨーク在住時代にも都會生活を厭うて居た、千八百三十六年新聞事業を罷めて西方へ移住しようと計つたことがある、其時兄弟に送つた手紙に曰ふ。

……市民は儲金の外は何事をも思はず語らず候、市は益々不潔喧騒を增し申候、生は最早都會生活に厭き〳〵致し地方に暫く暮し度く有之候、生は長らく一日刊新聞の編輯に從ひ居り候へば、此度は閑暇の身となりて好きな文學にたづさはり度く思ひ居り候。

其後彼はロング島のロスリンに別宅を構へて、屢々此所に退いて逍遙し、沈思し、詩作し、五十歳以後より死するまで、旅行せぬ時は、毎週二三日を此地に費した、天然に關する詩の多いのは彼の一特色である。

或人は彼の人物について云ふた、『彼は模範的のローマ市民とも云ふべき人であつた、彼の犯すべからざる威嚴と崇高き嚴肅とは、ローマの元老院議員として最も適當なものであつたらう、彼の人格は高くして近より難きものがあつた、彼は愛すべき人ではないが、彼ほど稱讃され尊敬された人は少い』と。

詩風

彼の詩は彼の人格のやうである、やゝ古雅な所があつて整齊と品位

とをその特色とする、The Wordsworth of America（米國のウォルヅヲス）と呼ばるゝが、ウォルヅヲスの詩ほど深く人を牽く力はない、されどウォルヅヲスに勝るも劣らざる品位と、そしてウォルヅヲスにはない一種嚴肅沈鬱の調子が人を森然とせしめねばやまぬ、彼は英國などに於てはロングフェロー、ローエル、ホイッチャほどには聞えぬといふことであるが、「米國詩壇の父」たるにふさはしき程の重味を豐かに有することを我等は認める。

叙事詩

ブライアントの叙事詩は數少く、又彼が力をこめて作つたものとも思へぬが、其可憐な物語も全く無意味のものでなく、全體の精神から見るも處々の名句から見るも貴むべきものと云はねばならぬ、其

多くは米國土人の間の古傳を詩にしたもので、米人の輕蔑し驅逐する土人の間にも人間らしいやさしい分子のあることを示したものである、思ふに土人も亦白人同樣人間であるといふ意を傳へて人類一如の理想を說いたものであらう。

白足の鹿（The White-footed Deer）は動物に對する米國土人の强き愛着心を描いたものである。

土人の娘の哀哭（The Indian Girl's Lament）は戰場に斃れた壯夫に對する女の哀哭を詠つたもので、土人にも亦愛情、悲愁、未來觀等のあることを示して居る、娘の哀哭に曰ふ。

墓界の長き旅を終へて、
汝は終に光明の鄕に、
輝きて芳しき空氣の中に、

善人、勇者の靈と交る、
今ぞ汝は幸福なる。

記念碑の山(Monument Mountain)といふのは、土人の間の悲しき愛を詠つた詩である、土人の或娘が從兄を懷ふ身となつたが、種族の間の習慣上從兄妹同志の婚姻を禁じてあるため、遂に或日一人の親友と共に山に登り、父の曾て調へてくれた凡ての裝飾を身に着けて終日二人で歌ひ暮し、髪には咲き亂れたる花をかざし、夕方友を歸らして自分は斷崖を飛び下りて死んでしまつた、彼女はかくして煩勞多き此世を去つて、

悲哀が心を壓し眼をくもらすことなき
靜肅なる輝く世界にまで

行くこと丶信じたのであつた、土人は後此場所に記念の標を建てた、

そして今尙ほ「記念碑の山」と呼ぶ。

此詩は土人の優しさと其未來觀念を示すと同時に、「美しき死」といふことを暗示したもので、西行の、

ねがはくは花の下にて春死なん
そのきさらぎの望月のころ

といふ歌と其精神に於て等しく、何れも「死の美」を形に托して說いたものと自分は思ふ。

自由の詩

ブライアントの自由(liberty)に關する詩を少しく紹介して其思想を窺つて見たい。

井ルヤム・テル(William Tell)と題する十四行詩は、名の通り瑞西の愛國

者を讃美したものである。

鐵鎖は弱き男子を屈せんも
鐵腸の爾テルを伏する能はず、
爾は山地の人なればなり、
山は永久の自由を說いてやまず。
千古の雪は自由を語り
冬を來らす神力の外
止むるものなき激流は自由を轟かし
天來颯々の風は自由を傳ふ。
爾は暗き獄舍にありて
自然の敎へし敎訓を沈思ひぬ、
短き幽囚の夢に
自由國スヰッザーランドの幻は浮びぬ。
苦き杯は爾を强めぬ
祖國自由の大業のために。

山地の產なる自由を讃美した詩人は、之が完全なる實現を北米の新世界に求めたのである、彼が十四世紀の瑞西を歌うた心は十九世紀の亞米利加を勵ます心である。

おゝ大種族の母よ (Oh, Mother of a Mighty Race) は、彼が米國に對する希望を述べたものである、大種族は米人を指したもので、母といふのは米國のことであらう、其大意はかうである。

おゝ大種族の母よ、汝は若々しく、頰は輝き、歩みは疾し、眼には希望溢る、汝の姉等(舊世界の諸國)は汝を憎まんも、汝は子等(米人)と共に安らかに住む、汝の中にては信仰は保たれ、眞理は貴ば

れ、人は愛せられ、神は畏れらる、汝の中には自由宿り、弱き者、逐はれし者、壓せられし者は、皆汝の中に隱家を求む、若き母よ、汝の額はます〳〵優に、汝の眼はます〳〵輝き、汝の姿は高く聳えん。

預言者イザヤが理想國を仰望せしと同じ精神が、此新世界の詩人を動かして此歌を詠はしめたのである、そしてかくの如き希望を自國に繫いで居た愛國的詩人が、南北戰爭の破裂に際し北部のために歌つたのは當然である。

我國の召呼(Our Country's Call)に於ては、彼は、

斧を棄て鍬を擲ち
鋤を其塲に遺せよ、
銃と劍とは

今や卿等の腕にふさはし、

と說き起し、

權力と正義とが手に手を取つて動く
に至るまで戰へと結んである、彼も亦正義の完全に行はるゝ國を地上に期待したものと見える。

奴隷制度の終止(The Death of Slavery)は南北戰爭終結後の作にして、「感謝の國民歌」と呼ばれたのである。

リンカンの死(The Death of Lincoln)は哀悼の曲にして、最後に曰ふ、

汝の生涯は潔かりき、
其悲慘の終焉は汝を光明の子の中に置く、
正義のために死せし人々の
貴き群に汝を列らしむ。

彼は熱血の湧くまゝに戰爭歌を歌つたものゝ、其純なる思想に於ては平和主義であつた、彼は一刻も早く戰の終ることを希望し、戰爭後にも、

お丶鬨の聲の再び聞えざるを願ふ、

と歌つて居る、此點を明かにするために、「自由の詩」といふ題下にては少し不適當ながら、次に二個の詩を紹介する。

農祭の歌 (Ode for an Agricultural Celebration) は戰よりも農業を重んずる思想を歌つたものである、先づ、

昔は農業が何よりも貴まれたのを、其後奪掠者が此世界を養ふ勞働を蔑視して血を以て土地を汚した、今は人類は此流血てふ過去の罪を悔ゆるのである、

と說き、次に曰ふ。

戰は其華觀を失はん、
勇士の好む英名
激鬪にて得し榮光は
消え、衰へ、終に亡びん。
全世界に、
永久に、
收穫を起し民を養ふ技術に
榮譽は加へられん。

戰場 (The Battle-field) は先づ、

戰爭に出でたる者は今戰後にて休息に入るけれども、汝(假定の一預言者を指す)は世に今容れられぬ眞理のためにより難き戰をなすもの、汝の戰は一生續く、辛勞慘苦の幾年を送り汝は孤獨の戰を

なす、されど世の嘲笑と猛撃に屈する勿れ、終に勝利は汝に來る、
と云ふ意味を歌つて、結尾に曰ふ。

眞理は、地に碎かるゝも、再び起たん、
神の永世は夫れの屬なり。
されど謬想は傷けられて苦みもがき
其崇拜者の間に死す。

汝の味方は恐れて逃れ
汝は地に塗るゝの人となるも、
此戰の死者のごとく（此戰は南北戰爭を指す）
希望と信頼に充ちて死せ。

他の手代つて汝の劍を取り、
他の手代つて汝の旌旗を振らん、
かくて眞理は終に勝を得て
勝利の譜は汝の墓に奏せられん。

ブライアントが「流血の戰」よりも、「鋤の戰」を重んじ、「眞理のための孤鬪」を讃美せしことは忘れてはならぬ。由來亞米利加の詩人には自由に關する詩が多い、自由を讃美することは彼等の著しき特徵である、勿論、信仰の自由のために本國を逃れ來つた清教徒の植ゑた國で、又政治的自由のために弱力を以て故國に抗した「獨立の先祖等」の建てた國である故、此事あるは當然であらう、しかし彼等詩人は唯「自由々々」と空騷をしたのではない、彼等は米國を以て其あらゆる意味に於ての自由を實現しつゝ進む天職を

有するものと信じた故に、其自由を叫ぶ時には、米國の使命と世界進歩の歸向とを思考の中に入れて居つたのである、彼等が南北戰爭の時北部のために盡したのは、奴隷を憐む心の外に、米國をして其使命を果さしめんとの希望があつたからである、即ち彼等は全人類を包む廣い自由を思つたのである、そして又何よりも平和を貴んだのは彼等詩人の特徴である。

天然の詩

ブライアントの詩の重なる主題は二つある、其一は天然、其二は人生(重に死)である。先づ天然に關する詩を見るに、ウォルヅヲスの如き詩想豐かに眞情流露する天才の作と比肩することは出來ぬもの丶、誦者をして深き沈想に入らしむる彼の眞率は他に比類を見難きもの

である。

彼は如何やうに天然を讃美したであらうか。

一森林の入口に刻す (Inscription for the Entrance to a Wood) は、

旅人よ、汝もし
世の罪業慘苦に充つるを知り、
その悲哀、積罪、煩勞多きを看て
心醇する所あらば、
この林に入りて天然の領を睥よ、
靜けき木蔭は靜寂を供し、
綠葉を躍らす快き微風は
汝が傷める心に安慰を送らん。
汝を苦しめ、汝をして

生を厭ふに至らしめし
人界紛々の事は此處に無し。

と說き起して、進んで大樣次のごとく歌ふ。

この蔭濃き地は尙ほ歡喜の住む所である、綠の枝は屋根をなして、
自由に歌ひ快活に躍り廻る鳥と相呼應し、下には栗鼠が愉快さう
に饒舌る、昆蟲は日光の中に舞踏する、翠の樹々も深き滿足を感
ずるが如く軟風に戰ぎ、日光は靑き空より來つて此ところを祝福
する……小川は愉快な音を發し、小石にあたり岩を越え、絕えず
笑ひ續けて自己の生存を喜ぶが如くである、流れを弄ぶ軟風は汝
(旅人を云ふ)に來りて汝を輕く抱くであらう。

實に歡喜的天然觀とはこの事であらう、彼と等しく米國に生れて等
しく天然を讃美したトローは曰ふて居る、『自分は每日少くとも四時

間は山林の中を逍遙する、かの終日家に閉ぢ籠つて居る近世の文明
人は、よく病氣にならぬものだ、……林中深くわけ入つて後、顧み
て市街を見ると星の如く小さく見ゆる、實に文明世界といふ人間の
領分は天然世界に比すれば比較にならぬ程小さい處だ、其小さい場
所に政治とか工藝とか文學とか宗敎とか云ふ物共がわい〳〵騷いで
居るのである』と、彼は又曰ふた『人間の世界に這入ると私は私をつま
らぬ人間としか思へない、天然世界に入つて初て自己を見出す』と、
二人は同じ事を、一人は詩を以て歌ひ一人は散文を以て述べて居る
のである、我等は社會の壓力に押し倒されぬやう屢々天然を探つて、
人の手に造られざる天性のまゝの山川草木に天然の神に近く接せね
ばならぬ、人間の造つた社會は最も天國に遠いものであることを忘
れてはならぬ。

森林を讃美する歌(A Forest Hymn)も天然歌である、先づ說く。

森林は人類最初の神殿であつて、人が大なる會堂などを造つて讃美歌の合唱を反響させて嬉しがる前には、森の中で神を發見し、森の中で跪いて祈つたものである、其森嚴な天然に觸れて祈らざらんと欲するも得なかつたのである、然るに今日此聖き場所を棄てゝ、人間の手で造つた屋根の下で、群衆の中に騷然として神に祈るとは何たることであるか。

かくて彼は歌ふ。

父よ、爾が手此森を造りしなり。

……

これぞ謙遜なる禮拜者が
其造物主と交るための好拜殿なれ、

人間の華美と驕傲を傳ふる
堂屋の壯麗は此所になく、
爾の所造を汚す人類の浮誇を
表する空幻の彫刻は此所になし。
爾は此所に住む、此靜處に住む。
爾は樂を奏しつゝ樹々の頂を走る
軟風の中に住む、
爾は此の奥深くより來る
涼しき微風の中に住む。

……

爾は林中に
爾の完全を證するものを殘せり、

莊美と强健と優雅とは此所にありて爾を傳ふ。

尙ほ彼は進んで次のやうな意味のことを歌つて居る。

余は、沈默の中に我周圍に行はるゝ大奇跡を思ふて畏怖する、大奇跡とは永久の事業なる神の創造そのものであつて、出來上りては居れど永遠に改めらるゝものである、神が所造の上に彼の永久性は明かに表れて居る。

林中に深く隱れて思念と祈禱に一生を送つた聖者もあれば、かゝる隱遯生活を批難した聖者もある、とにかく余は屢々此閑處を訪づれて神の前に余が德性の回復を計り度い。

かくて最後に歌ふ。

我等この靜けき蔭に

爾の平和、莊嚴を沈思し、
爾の天然の整齊に則りて
我等の生涯を送らんと願ふ。

まことに大にして深き天然の讃歌である。

樹々の間にて (Among the Trees) も右に同じやうな詩である、唯其最後に將來の平和を歌ふ。

もつと立派な時代が來るであらう、其時には善と惡の長き戰終りて神の力世を治め、國々の王は民の鋤を奪ひて殺人の術を敎ふるために召集することなく、其時には今日勢威を擅にする暴力は大法の靜かなる叱责の下に倒れ、其同類なる譎詐も耻ぢて退くであらう。

彼は天然の詠歎にことよせて自己の大希望の一端を洩らしたのであ

る。

おゝ美しき田舍娘よ (Oh Fairest of the Rural Maids) は田園の自由なる生活を歎美した詩である。

汝は蔭深き森林に生れ
……
幼時の嬉戯の行遊は
常に林中にてなされたり、
森地の美は悉く
汝の心情と顔容に宿る。
……
汝の歩行は風の如し、
樹の間に戯るゝ風の如し。

……
人跡至らぬ森の奥所も
汝の胸のごとく聖からず、
此静寂の空氣を充たす
聖なる平和は汝が胸にあり。

彼はかくのごとく田園と田園に育つ人を讃美したのである。

小川 (The Rivulet) は、人生の移り易く現世の無常なるにくらべて天然の恒久なるを讃歎した詩で、プライアントの特色たる悒鬱深沈の調子が全篇に溢れて居る、此詩を誦しては誰人も沈思せざるを得ぬ。

秋の林 (Autumn Woods) も亦天然を讃美したものであつて、其最後に曰ふ。

人を狂はす浮薄、低劣、奮爭を棄て、

富貴權勢を得んとの力爭を棄て、
人生を枯らし短き生を徒らにする
盲慾と心勞を棄てゝ、
とこしへに汝(林)の中にさまよひ、
柔き西南風に撫でられつゝ、
いつまでも彷徨し夢想せんは、
あゝ世にも有り難き幸運にぞある。

彼はかく人生の紛爭を厭ひ、かく森林の彷徨を愛した、これ必ずしも厭世主義ではない、世に生活して世に呑まれざらんがためには、我等は森林の奥に聖なる姿を拜さねばならぬ。

ブライアントは天然を其凡ての形に於て讃美した、彼の天然歌には右に掲げし外**三月**(March) **夏の風**(Summer Wind) **西風**(West Wind) **新月**

(New Moon) **雲**(Cloud) **星**(Stars) **秋の聲**(The Voice of Autumn) **黄色のすみれ草**(The Yellow Violet) **北極星の讃歌**(Hymn to the North Star) **川の夜旅**(The Night Journey of a River) 等數へ盡せぬ程澤山ある、彼は尙颶風(Hurricane)を讃美し、進んで**蚊に與ふる歌**(To a Mosquito)までも作つて此萬人に嫌はれる小動物のために同情愛憐の曲を奏でた。彼にとりては天然物は如何なるものでも「神の形像」であつた、それ故彼は萬物に意義と歡喜とを見出してそれを歌ひ出さんとした、彼は漫然として天然の美を歌つたのではない、無意味に人を天然まで連れ行くのではない、必ず天然物に含まれたる或眞理の處まで人を導いてゆく、從て彼の詩に華かな處はない、いつも眞面目である、いつも深沈である、さうして色々の眞理を我等に與へるのである。

天然を愛して文明世界を嫌つた彼も、あまりに地上の美を歌ふのあ

まり時としては人間の世界をも讃美した、たとへば、

市を讃美する歌(Hymn of the City)に於ては大樣次のごとく歌ふ。

我等は山や野のみで神と交るのではない、群衆の中に於て、此喧騒なる市街に於ても、全能の御手がある、日光も家を照らすし青き大空も見える、皆神の賜物である、神靈は至る所に充ちて迷へる衆生に悔改を促して居る、夜が來て大市街が寂として休んで居る時、之を護るものは神である。

市街は人類が誇榮の所產であるかも知れぬ、しかし大能者は之れをも護り給ふといふことを歌つたのである。又、

小道(The Path)は小山の側に造つた小道の開通を感謝した詩である。

廣漠たる森の中で迷つた旅人が小道に出逢へば、雀躍して心も輕くなり、同胞のなつかしい足跡にキスし、神に感謝する、そして

人間の住む場處の近いことを知つて恐怖なくして歩み出す。

なぞ〻樣々に道路の有難味を說いて最後に曰ふ。

小道が大道に合し、大道が地上を逼つて山に上り谷を通り、延びて〳〵東洋と西洋とを結び太洋と太洋とを連ね、遂に世界人類は一國となりて相親しむことであらう、されば交通といふことは有難き人類の本能である、之のために人類がだん〳〵親んで來るのである、かの海に戰艦を浮べて交通を妨げんとし山に砲壘を築いて他の入來を阻むが如き者共は、惡虐の手を以て汝(神)の聖業を破らんとするものである。

彼はかく「交通」をも讃美して世界平和、人類一如の將來を待望したのである、そして彼が非戰を主義としたことは此詩により又前掲の「樹の間にて」によつて明かである。

詩人が天然物にことよせて自己の宗教的信仰をあらはした詩に尙ほ**龍膽に寄す**(To the Fringed Gentian) **水鳥に寄す**(To a Waterfowl) の二がある、彼が短詩の双璧とも云ふべき立派なものであるが後者の方だけ紹介する、第四節より譯すると、

彼の道なき水際に沿ひ
荒漠無限の空を通じて
汝を(水鳥)導く一の力あり、
汝はひとり彷徨ひて、しかも迷はず。

天の高處、冷き上空を目指して
汝は終日舞ひ上れり、
暗き夜は近よるとも

憊れて地に下ること勿れ。
間もなく汝の辛勞は終り、
汝は涼しき住家を得、
友と息み且歌はん、
葦は曲りて汝の巣を蔽はん。

＊　＊　＊

あゝ汝は去れり、
青空は汝の姿を呑めり、
されど汝の與へし敎訓は
我心情に深く入りて去らじ。

帶より帶、極より極に、
無涯の空を通じて確實に汝を導く者は、
我がひとり歩む長途にても
正しく我足を導き給はん。

もし「龍膽に寄する詩」が希望の死を歌つたものとすれば、これは希望の生を歌つたものである、共に宗教的信頼の詩として上乘なるものであらう、我等も亦人生の方向に迷ひし時にブライアントを慰めた水鳥を思うて、孤獨數十年の戰をなす覺悟を有さねばならぬ、水鳥は神の指導と自己の羽翼との外頼む處はなかつた、我等も亦金錢や權勢や衆愚などの力に頼つて水鳥に劣るの譏を受けてはならぬ。

人生の詩

勝利者の墓 (The Conqueror's Grave) は人生の眞の勝利者は誰であるかといふ問題に極て明かに答へたものである。

此小やかな墓の下に一人の勝利者眠る、人の知らぬつまらぬ墓で碑の表面には唯の名が記されてあるのみである。此中の人は鐵身血腕地を奪ひ敵を褶伏するを事とした人ではない、否、やさしい人で、心も容も穏かで、親切の微笑は顔に溢るれど、一度他人の苦を聞いては顔を曇らす人であつた。

彼女(墓の主は婦人である)の仕事は獨りにてなされ、戰は孤高の戰であつた、其長き戰の間彼女は神のみに希望を置いて他の助けを願はなかつた。彼女は悲哀と戰ひ苦痛と戰ひ、失望を斃し、主の名に於て愛を以て憎惡を逐ひ、善を以て惡を滅ぼした。

時に日は低く西に傾きぬ、

冷き空氣は夜の近きを告げぬ、
おゝ靜かなる眠れる人よ、汝の墓を、
我は悲しき中にも慰められ、
希望の中に恐怖もありて去らんとす、
我は知る、時は短かし、
而も戰は始まりし所なり、
されど汝の得し勝利は誰人も得るを得ん、
汝を養ひし源流は今も流るゝなり。
然り、我等は此「源流」に養はれて此「勝利者」の一人とならねばならぬ、
外に戰はずして衷に戰ふことが眞正の戰であり、そして此戰に勝つてこそ眞正の勝利であることを充分に知るべきである。

神の愛 (The Love of God) は曰ふ。

地上の萬物は皆過ぎ逝らん、
唯神の愛のみ永久に活く、
……
國々は皆失せ
支配者も死に屈まん、
地球も亦高熱に溶け崩れん、
萬事萬物皆去らん、
唯神の愛のみ永久に活く。

神の愛は盡くることなし、そして此事さへ益々明かにわかれば、他の事は凡て消え去つてもかまはない、此世がどうであらうが、遂に亡びようが、神の恩惠のみ失せずば我等は巖の上に立つが如く安心であると云ふ意味であらう、丁度哥林多前書十三章八節以下にある

使徒パウロの愛の賞讃と相照應する言辭である。

ブライアントの詩には「人生の無常」といふ情緒のたゞよつて居ることが多い、彼は人生世相の眞を見て、先づ深く時の過ぎ易きと生の移り易きとを感じた。

春の日は琥珀の光を放ち (The May Sun sheds an Amber Light) は、千八百四十七年彼五十四歳の時齡老いし母を失ひて後其墓畔に哭せし詩である、實に美しく又悲しき短詩である、彼は飽くまで人生の悲曲に泣いた詩人である。(此詩は內村鑑三氏著『愛吟』にあり)

老人の忠言 (The Old Man's Counsel) の大意はかうである。

時は五月にして野は輝き花は咲き鳥は歌ひ、自分は天然の美に包まれて愉快でたまらぬ、處が伴侶の老人は悲しさうな顏をして居る、自分は何故と尋ねた。

老人は答へた、『君の喜ぶのは齡が若いからだ、併しいまに段々衰へるとさうは行かぬ、小供の時は時間が靜かに過ぐる、晝間が長い、壯年となつては時はもつと早く過ぎる、老人になると時は舞つて行く、私は急流を下る舟に乘つて居るやうなもので、もう最期の時は近い。』

老人はかく人生の無常を歎じた後、

『それ故若い間に早く美德を得、純潔な思想を得、神と人とに對する愛敬を學べ、さらば年老いても心思衰へ心情さびれることはない』と忠告した、實に忘れがたき忠言であつた。

併しブライアントは唯人生の悲哀をのみ歌はない、彼は好んで死を歌つたけれども絕望的の死を歌つたことはない、悲哀に始まつて歡喜に終り、失望に始まつて希望に終るのが彼の人生に關する詩の著

しき特色である、彼は夜を歌ふけれど曙を共に歌つた、暗の次に光の來ることを歌つた、一言にして云へば彼は「無常的希望觀」を抱いて居た、眞に希望の貴さを知るがためには、先づ深く生の無常を知らねばならぬと考へた。

老人の葬式 (The Old Man's Funeral) は死を讃美した詩である、或老人の死床に歎く人々に他の一老人はかう云つた。

我等の老友死ねりとて何の涙ぞ、
汝等は刈られし穀粒を見て泣かず、
採られし豐熟の果實を見て泣かず、
栈られし大木を見て泣かず。
風靜まれる爽けき夕、

日輪は空と地を照らしつゝ、
其大なる行路を終へ、
休息の地に沈み行き、
別離の微笑を放つて殘光天と山を
赤く染むる時、汝等歎かず。

さらば汝等何とて彼のために泣くや、
彼は遂に命數をつくし、
人生の恩寵を受け、人生の勞働を終り、
靜かに休息の地に入りしなり、
かくて落日の後の殘紅のごとく、
彼が美德は人の記憶に殘れり。

彼が少時は純潔なりき。
長じては毎日善事を爲し、
老いては愛する者に圍まれつゝ
靜かに其晩年は過ぎ行けり、
かくて安んじて其命を卒はり、
良き生涯の結果なる聖き休安に入れり。

彼は生を樂めり、日々彼は
其樂しき生活を感謝せり、
病想は彼を囚ふる能はず
欺く能はざりき、
奢侈と怠慢の病魔を誘ふなく

老年にして彼の四肢は健なりき。
かくのごとき善良强健なる生を送り得るものを、唯徒らに死を悲む
は愚である、日々善をなすことを心掛けつゝ生を樂みて感謝の中に
日を送り月を過ごすことこそ我等の願である、神の造り給ひし宇宙
にありては萬事を其光明の側に於て見るべきである、我等は人生の
良き面を見て之を樂しみ、病想(sick fancy)の囚ふる處となつて暗黑
のみを好むものとなりたくないものである。
死觀(Thanatopsis)は彼の傑作として有名なものである、しかし二十歲
未滿の時の作である故、後年の詩に見ゆるやうな深き思想と高き希
望とは缺けて居るやうに思ふ、さりながら少年にして早く既に「死」に
ついて深く思ふといふのは、彼の思想が一生の間如何に强く死とか
來世とか云ふ方面に向つて居つたかを示すものである。

汝は唯一人で墓に下るのではない、そこには古からの王、賢者、善人、預言者など皆同居して居る。そして山や谷や川が墓地の傍にあつて皆墓地を飾り、又太陽も天の諸星も其處を照らす。地に生ける人は墓に眠る人の極小部分である、汝が唯一人で死ぬのではない、人は一人殘らず死ぬのである、老人も少年も壯婦も少女も皆汝の側へ行くのである。

といふ意味のことを歌つた後最後に曰ふ。

汝は奴隷のごとく鞭うたれて
牢舍に入れらるゝにあらず、
確實なる手にて支えられ慰められて
汝の墓に近づくなり、
恰も寢臺に横はりて

樂しき夢を見んと眠る人の如し。

「確實なる手」といふのはテニソンの辭世の詩によれば「水先案内」である。明瞭な語にて云へばイエスキリストである、之に信頼して安んじて死ぬのである、又死者を「眠る人」に譬へたのを見れば又覺むる時を豫想したに相違ない、即ち復活の希望を我詩人は抱いて居た。

二墓の墓(The Two Graves)は明かに復活の希望を歌つたものである。

彼等は且つ祈り且つ俟つて此邊を去らず
彼等の肉體が地を離れて出で來るまで。

といふ此詩の結尾は以て彼の抱いた希望を知るに足るものである。

死を讃美する歌(Hymn to Death)は二百行に亘る死を讃する詩である、處々の意味を述べよう。

人は汝死を「恐怖の王」「世界の破壞者」として呪ふが、余は死を讃美す

る、汝を呪ふ者は生きて居る人々である、汝を味はず汝を能く知らぬ人々である、罪を澤山重ねて恐怖に堪えぬ人々である、けれども善人は重荷を去る者、平和を與へる者として汝を喜ぶのである。汝は救出者である、弱者を解放し壓制者を碎かんために神の下し給ふ者である、汝は傲慢にして己れを全能者と等しくする此世の英雄を一擊の下に斃し、暴王の命を奪つて地を再び民に與へる、凡て驕る者、傲ぶる者、己れに恃む者、弱者を壓する者、神法を蔑視する者は、汝の捕へる處となりては無に歸してしまふ。

かくのごとく死を讃美して、終りに死者に對して次のごとく曰ふ。

されば汝、神の胸に息め、
短かき睡眠終りて
遂に塵より起ちて

惠まるゝ新生に至るまで。

其復活の希望を傳へるものなることは明かである。

愛の埋葬(The Burial of Love)の最後に曰ふ。

今我等が地中に埋めたる人は
後再び生きん、
光の體、崇高き容姿、清き姿にて
此土塊を破りて出で、
高く、神の右の手に近く、
永久の榮光の中に立たん。

過去(The Past)は妹の死せし時に歌つた詩である、其大意に曰ふ。

汝過去よ、汝の中には人に知られぬ美事善行が隱れて居る、世に發表されぬ慈善や確固不拔の信仰なども隱れて居る、悲哀の中に

起つて死の中にたぢろがぬ愛も亦汝の中にある、凡そ善なること
凡そ美なることが凡て汝の中に隱れ去つた。
之等過去の中に沒せし凡ては絶滅したのではない——
之等は決して滅せしにあらず、
深切なる語、美しかりし彼の聲、
嘗て輝きし彼の微笑、
及び大精神を宿せる顏容——

凡てが再び表はるゝなり、
愛の絆は再び結ばるゝなり、
唯惡のみ亡び
悲哀のみ囚へられん。

復活と之れに伴ふ再會の希望である、眞に美しく又眞に人を慰むる希望を詩人は奏で出でたのである、之を迷信とし空望として排するは隨意である、しかし愛する失せし者を深く懷ふ誠實の人にして此希望によつて非常なる慰藉を受けしもの多きを見れば、我等は唯右を以て詩人に有りがちな空想と斷ずることは出來ぬ、もし神が宇宙を支配し宇宙が光明の所であることを信ずるならば、我等は詩人と等しき希望を抱いて差支ない筈である。

時の流れ(The Flood of Years)はブライアントが最後の詩であつて最もよく彼が思想の特色を表すものである、先づ時は洪水のごとく萬事萬物を流し盡すといふ彼一流の無常觀を長く記した後、最後に失はれし生の復活に說き及んで次のごとく曰ふ。

舊友は再び會し、

たとへ難き喜悅を以て手は手に握られ、
母は其失ひし愛兒をひしと抱く、
舊き悲哀は今は忘れらる、
或は記憶せらるゝも償はれて餘りあり、
傷み破れし心情は長へに醫やさる。

詩人時に八十餘歲、先ちし父母、兄弟、妻と會すべく洋々たる希望の風に乘つて彼方光明の鄕國を望み、其希望を筆にして遺す、美なり、大なり。

大なる詩人の一生と其詩とを味はつて我等も人生について深く思ふ人とならねばならぬ。

平民詩人終

不許複製

大正三年四月二日印刷
大正三年四月五日發行

著作者 內村鑑三
著作者 畔上賢造

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者 福永文之助

横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者 村岡平吉

定價五十錢

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所 警醒社書店
振替東京五五三(電新一五八七)

内村鑑三先生著書

興國史談	定價五十錢	
地人論	定價四十錢	
眞操美談 路得記	定價十五錢	
外國語の研究	定價廿五錢	
内村先生講演集	定價五十錢	
所感十年	甲種一圓八十錢	乙種六十錢
研究十年		

■畔上賢造先生譯書

ヘンリ・ドラモンド氏原著——再版——

■人間上進論　定價五十錢　郵税八錢

トマス・カーライル氏原著——上・中巻——

■クロムエル　定價六十錢　郵税六錢

内村鑑三先生著書

獨立短言	定價五十錢
よろづ短言	定價五十錢
警世雜著	定價四十錢
獨立清與	定價十五錢
余は如何にして基督信徒となりし乎（英文）	上製定價一圓 並製定價五十錢
代表的日本人（英文）	上製定價一圓 並製定價五十錢

内村鑑三先生著書

基督信徒の慰め	定價卅錢
宗教と文學	定價十六錢
傳道の精神	定價廿錢
求安錄	定價卅錢
後世への最大遺物	定價十五錢
宗教坐談	定價卅錢

內村鑑三先生著書

內村鑑三先生著書